長崎県文化財調査報告書　第179集

下木場遺跡

2004

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第179集

下木場遺跡

発刊にあたって

この報告書は，長崎県教育委員会が平成15年8月18日から平成15年10月31日にかけて南高来郡有家町で実施した下木場遺跡の発掘調査の記録です。

有家町には，西鬼塚石棺群や堂崎遺跡をはじめ，数多くの遺跡が知られていますが，下木場遺跡は旧石器時代から奈良・平安時代まで，長い間の先人の生活痕跡が残る貴重な遺跡です。

今回は農免農道の建設に伴って遺跡の一部を発掘調査いたしました。そのころ同町では圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査もおこなわれており，あたかも発掘調査ラッシュという観を呈していましたが，関係者の御理解と御協力により，円滑に調査が実施できましたことに感謝申し上げます。

このたびの調査では旧石器時代や縄文時代，さらには弥生時代の遺物や遺構が発見され，有家町の歴史に新たな頁を加えることができました。

下木場遺跡の調査成果を記録した本書が，文化財の活用や文化財保護に広く活用され，されには本県の学術文化の進展に寄与することができれば幸いに存じます。

平成16年3月31日

長崎県教育委員会教育長　木 村 道 夫

例　　言

1. 本書は平成15年度に実施した農免農道整備事業（有家4期地区）に伴って実施した長崎県南高来郡有明町原尾に所在する下木場（しもこば）遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

2. 調査は長崎県教育委員会が主体となり，範囲確認調査を平成14年12月16日から12月20日まで。本調査は平成15年8月18日から10月31日まで実施した。

3. 遺跡の空撮は（株）埋蔵文化財サポートシステムがおこなった。

4. 遺構の実測は調査担当者がおこなった。

5. 遺物の実測は石器を中村ヒロ子，山田英明，古門雅高が，土器を古門がおこなった。

6. 調査中の写真はそれぞれの調査担当者が撮影し，遺物写真は古門が担当した。

7. 図面のトレースは和田美加，浜崎美加，横田愛子，成田万里，拓本は冨永諭美の協力をえた。

8. 本書における遺物・図面・写真などは長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。

9. 本書の執筆は古門，山田がおこなった。

10. 本書の編集は古門による。

目　　次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 ……1

第Ⅱ章　調査に至る経緯 ……3

第Ⅲ章　範囲確認調査の概要 ……3

第Ⅳ章　本調査の概要 ……4

第1節　調査の方法 ……5

第2節　層　　位 ……5

第Ⅴ章　遺　　構 ……7

第Ⅵ章　出土遺物 ……11

第Ⅶ章　総　　括 ……20

第1節　三稜尖頭器 ……20

第2節　有明海西岸地域における弥生時代後期の土器 ……22

挿 図 目 次

第１図　下木場遺跡位置図（S=1/25,000）……2
第２図　下木場遺跡周辺の遺跡（S=1/25,000）……3
第３図　下木場遺跡位置図（S=1/4,000）……4
第４図　下木場遺跡調査区，試掘坑（S=1/1,000）……5
第５図　下木場遺跡土層図（S=1/30）……6
第６図　遺構配置図（S=1/400）……7
第７図　調査区遺構配置図①（S=1/200）……8
第８図　SD1遺構実測図（S=1/20）……9
第９図　SK1遺構実測図（S=1/20）……10
第10図　SK2遺構実測図（S=1/20）……11
第11図　SK4遺構実測図（S=1/20）……12
第12図　調査区遺構配置図②（S=1/200）……13
第13図　SK6遺構実測図（S=1/20）……14
第14図　縄文土器実測図（S=1/3）……16
第15図　弥生土器・古式土師器・須恵器実測図（S=1/3）……17
第16図　剥片石器実測図（S=2/3）……18
第17図　礫石器実測図（S=1/2）……19
第18図　脚台付甕形土器の型式変化と高杯形土器の型式と型式変化……25
第19図　各遺跡の脚台付甕形土器と高杯形土器……27

図 版 目 次

図版 1　SD1検出状況 ……9
図版 2　SD1半截状況 ……9
図版 3　SK1完掘状況 ……10
図版 4　SK2完掘状況 ……11
図版 5　SK4検出状況 ……12
図版 6　SK4完掘状況 ……12
図版 7　SK6検出状況 ……14
図版 8　SK6半截状況 ……14
図版 9　SK6完掘状況 ……14
図版10　剥片石器① ……31
図版11　剥片石器② ……31
図版12　礫石器① ……32
図版13　礫石器② ……32
図版14　土器① ……33
図版15　土器② ……33
図版16　土器③ ……34
図版17　土器④ ……34
図版18　土器⑤ ……35
図版19　土器⑥ ……35

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

下木場遺跡は有家町の南部に位置する。有家町は島原半島の東南部にあり，雲仙火山起源の火山放出物が堆積して形成された火山性扇状地（有家扇状地）に立地する。地表面は南東方向に緩やかに傾斜しながら海岸部へいたる。

また小河川による浸食によって，多くの放射状の小谷が発達する。一見平坦地のように見えても後世の開拓によって平坦地が形成されているケースが多い。この有家扇状地の末端は，海岸部では海抜20～30mの段丘を形成している。

有家町の町域は三角形状をなし，北に小浜町，東に布津町，西に西有家町と境を接する。

下木場遺跡は大苑名に属し，小字名は通野（といの）で，旧堂崎村に含まれる。本遺跡名は下木場遺跡であるが，本来は通野遺跡であるという（平成14年度に遺跡名変更届けが有家町教育委員会より提出されている)。今回は事業の継続性という観点から下木場遺跡の名称を使用した。

遺跡の西側には貝森川が流れ，流域は深い谷を形成している。遺跡をのせる丘陵は，貝森川と堂山川の間に広がり，標高は50m～70mほどである。丘陵上は畑地として利用されており，とくにタバコの栽培が盛んである。遺跡付近には藩政時代に築かれた木場堤があり，付近の水田の水源となっている。なお遺跡から海岸までの直線距離は10㎞ほどである。

2. 歴史的環境

島原半島南部では近年，畑総事業や圃場整備事業が入り，各地で緊急発掘調査が実施されており，有家町も例外ではない。

下木場遺跡は1999年（平成11）に大苑地区県営畑地帯総合整備事業に伴い，有家町教育委員会がこの付近の確認調査を実施し，遺跡範囲が確定した。

これまで有家町も含めて島原半島南部で旧石器時代の石器は未発見であったが，本遺跡より三稜尖頭器が出土したことにより，この地域にも旧石器文化が存在することが判明した。

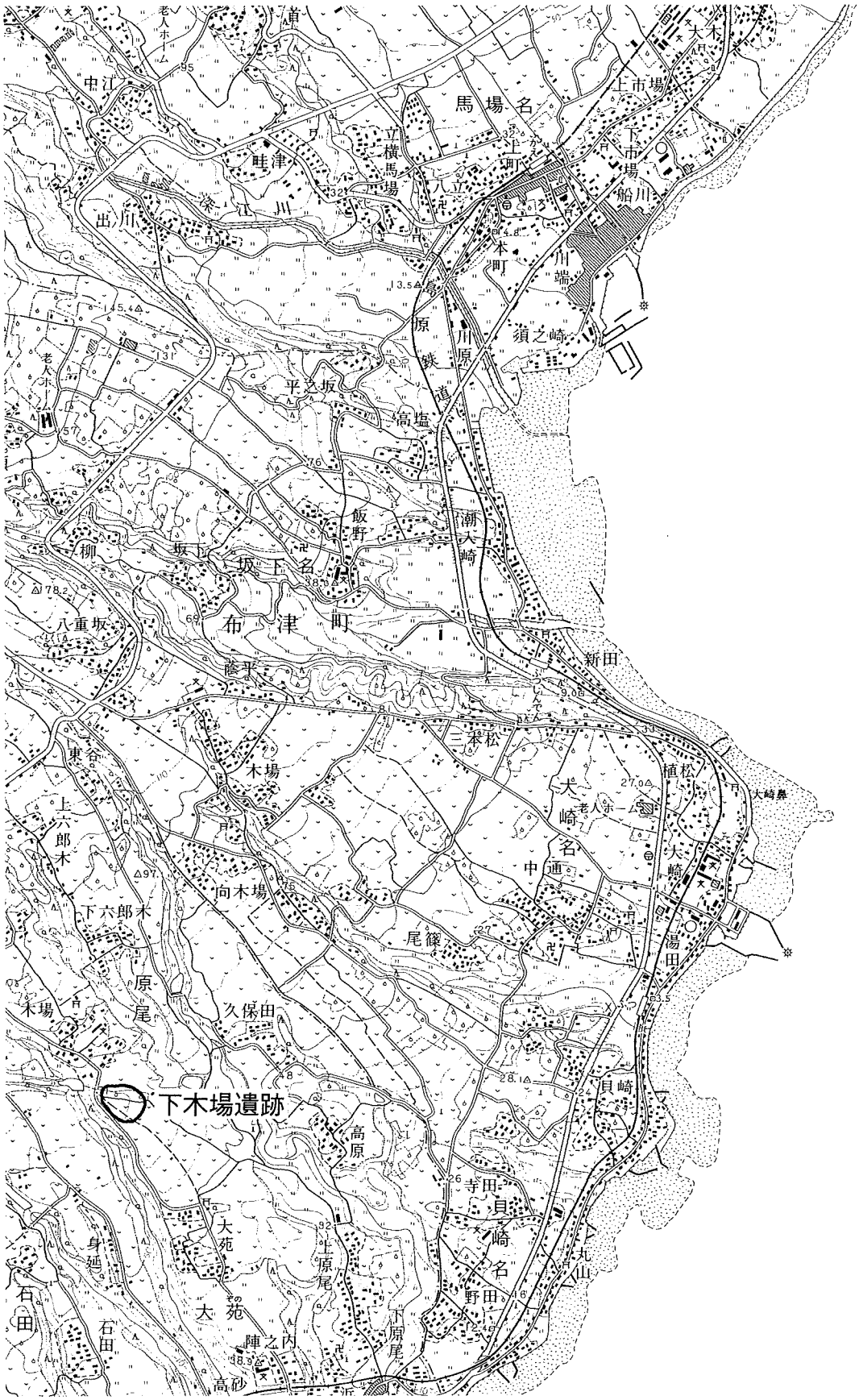
縄文時代の遺跡としては，貝森貝塚，堂崎遺跡，塩屋遺跡，池田遺跡，蒲河遺跡などがある。いずれも潮間帯に位置し，多くの礫器を伴う遺跡である。

縄文晩期終末（弥生早期）の遺跡としては，西鬼塚石棺が知られている（村川1997)。支石墓1基と箱式石棺墓4基が調査されている。5号石棺墓付近では，夜臼式の小形壺が出土している。

弥生時代の遺跡としては，先述した貝森遺跡，堂崎遺跡から弥生土器が出土している。『有家町誌』によると，昭和初期には鬼塚の石棺より「直刀・勾玉」の出土品があったという。

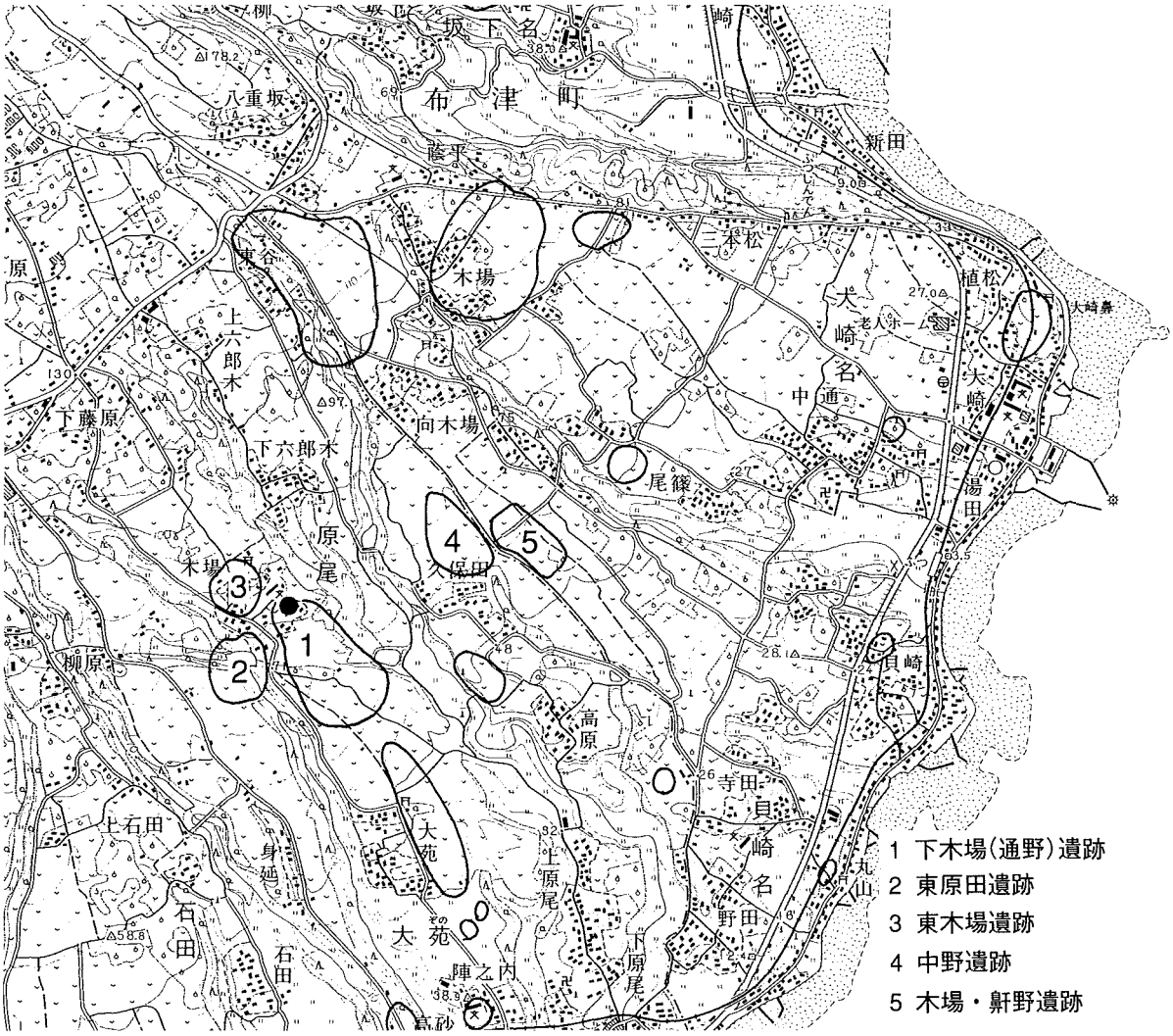
また，同町でよく知られている弥生時代の遺跡として堤遺跡がある。昭和34年に社宅工事中に甕棺墓などが出土している。

古墳時代になると数基の横穴式石室墳がある。原尾古墳，大平（うーびら）古墳，妙香古墳などが知られている。



島原湾

第1図　下木場遺跡位置図（s=1/25,000）



第2図　下木場遺跡周辺の遺跡（s=1/25,000）

第Ⅱ章　調査に至る経緯

調査は下木場遺跡の北東側の縁辺部に計画されている，農免農道（有家4期地区）建設に係るものである。下木場遺跡は1995年（平成7）に県文化課の分布調査によって縄文・弥生の遺物散布地であることが確認され，2001年（平成13）に長崎県遺跡地図に追加された。

2002年（平成14）12月16日から20日まで範囲確認調査を実施し，2003年（平成15）8月18日から10月31日まで本調査を実施した。

第Ⅲ章　範囲確認調査の概要

1. 調査期間　2002年（平成14）12月16日～12月20日

2. 調査面積　42㎡

3. 調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　文化財保護主事　本田秀樹

文化財調査員　井立　尚

4. 調査

発掘調査は，遺跡内を通過する道路延長約230mのなかに，2m×3mの試掘坑を5箇所と2m×2mの試掘坑を3箇所，計8箇所設けて行った。なお，本遺跡調査に先立ち，有家町野中遺跡も同事業に伴う調査を行ったため，試掘坑の番号はTP6～13と付した。

遺物は第6，7，8，9試掘坑で出土し，縄文土器は第6試掘坑で出土した。同試掘坑では弥生時代のピット2基も検出した。

範囲確認調査の結果，第6，7，8，9試掘坑を含む範囲（長さ80m，面積500㎡）については工事着手前に，本発掘調査が必要との判断に至った。

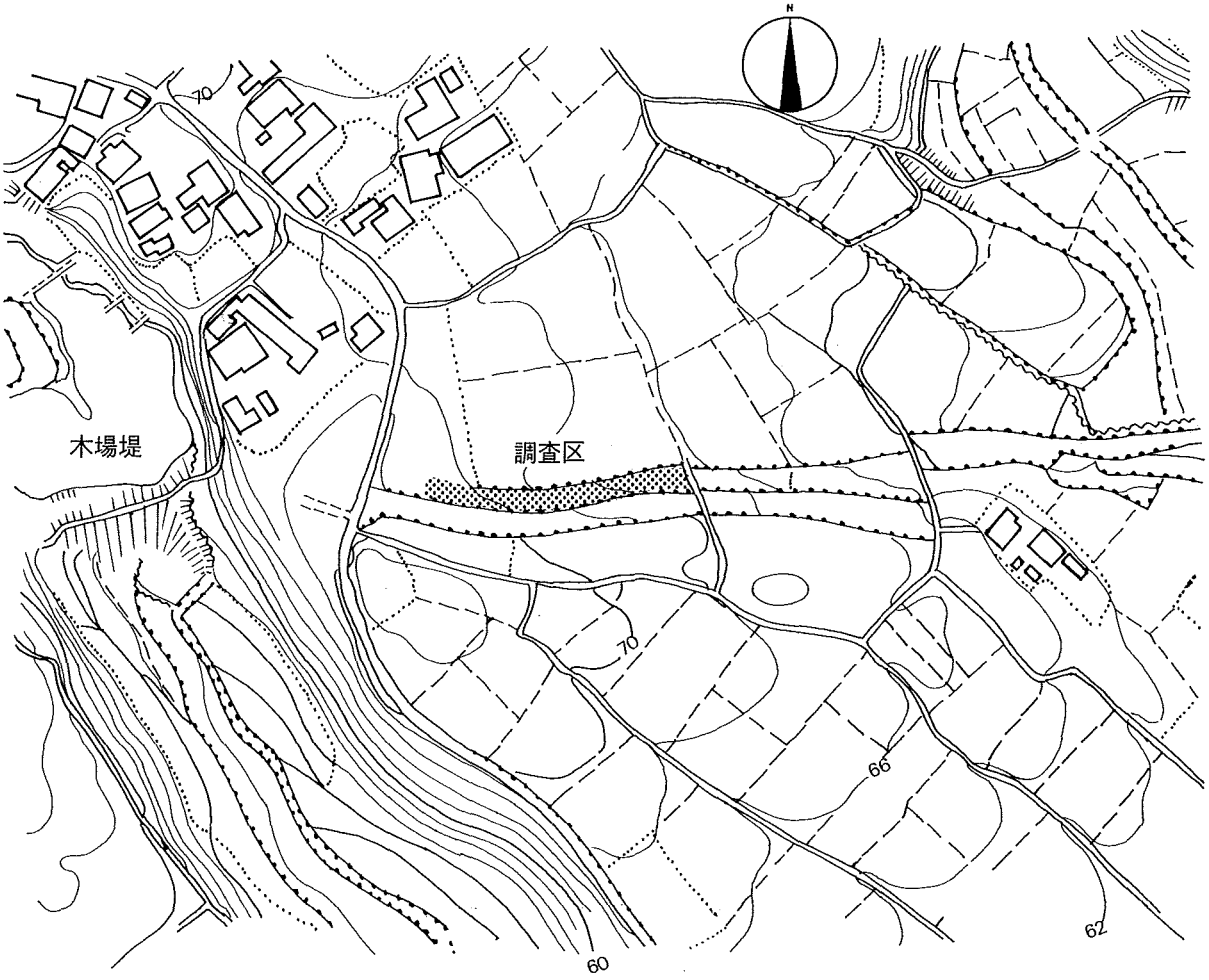
第Ⅳ章　本調査の概要

1. 調査期間　2003年（平成15年8月18日～10月31日）

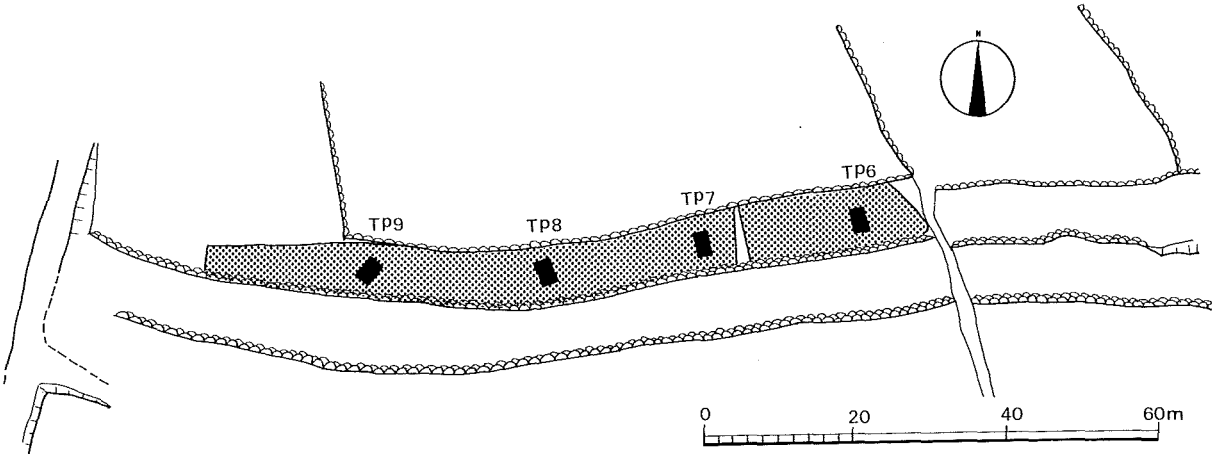
2. 調査面積　800㎡

3. 調査担当　主任文化財保護主事　古門雅高

文 化 財 調 査 員　山田英明



第3図　下木場遺跡位置図（s=1/4,000）



第4図　下木場遺跡調査区，試掘坑（s=1/1,000）

4. 調査

(1) 調査の方法

第2層とした弥生後期土器の包含層上面まで重機で除去した後に調査をおこなった。調査区はもともと傾斜地であったところを段々畑にするために，傾斜地の標高が高い部分をカットするという地形改変を行っている。したがって第2層以下の遺物包含層は調査区の北側に部分的に堆積するだけで，調査区の南側は削られて存在しない状況であった。幅3mほどの長細い調査区で，平坦に掘っていくと，調査区の底面の土層が本来は水平堆積ゆえに1種類のはずが，もともとが傾斜地ゆえ3種類にも4種類にもなるという典型的な傾斜地の様相を呈した。さらに段々畑が果樹栽培によって深耕を受けており，撹乱が著しかったのも調査がやりにくかった原因となった。

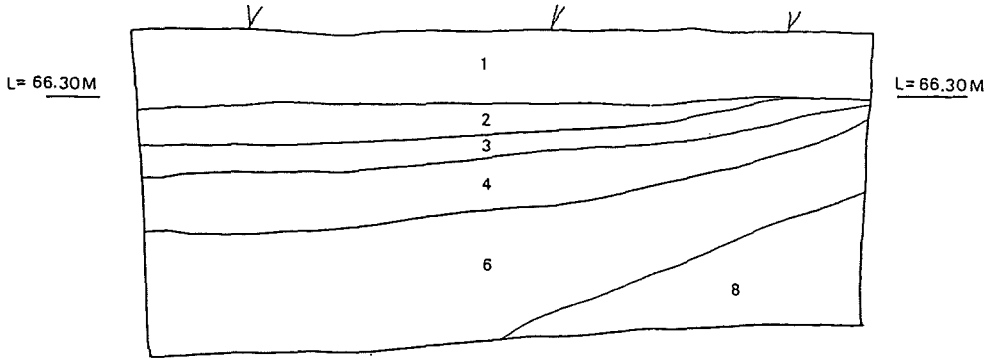
いずれにしても，範囲確認調査の折に包含層が調査区全面に残存すると予想されたが，実際はきわめて限定された場所にしか残っていなかったことが判明した。

調査はグリッド法でおこない，4m×4mのグリッドを基本とすることにした。必要があれば，グリッドを4分割し，a～dの小グリッドを設けた。

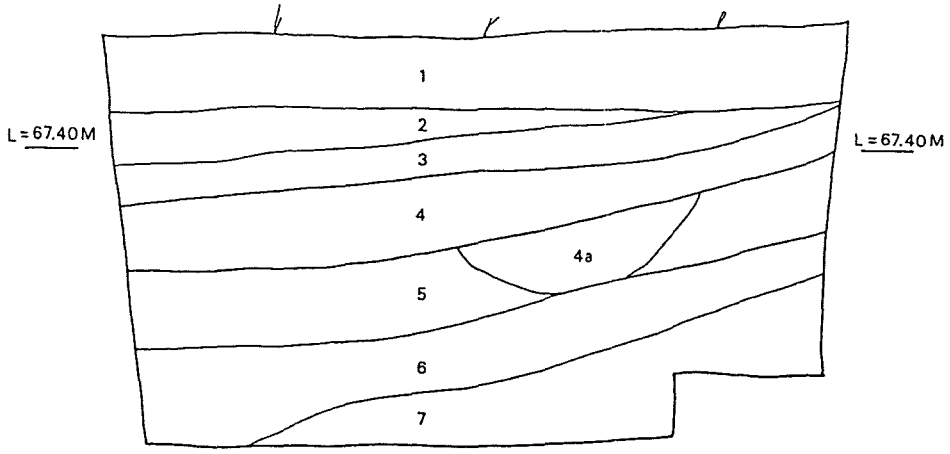
(2) 層位

基本層序は8層に分けられた。第1層は茶褐色の表土層で，第2層は明黄褐色土，第3層は暗褐色土層，第4層は明黄褐色土層，第5層は暗褐色土層，第6層は灰褐色土層，第7層は黒褐色土層，第8層は混礫赤褐色粘質土である。そのうち第2層からは弥生時代後期の土器が，第3，4層では縄文早期の土器が出土したことから，遺物包含層と判断された。しかし，前述したように，果樹園であったころの深耕により，層位の乱れや，撹乱があり，基本層位どおりの土層はみられない。さらに調査区はもともと傾斜地であったところを段々畑に改変しており，土層が水平堆積ではなく，斜めに堆積している。第8層にいたっては20度ほどの傾斜をもつ。縄文早期の押型文土器も旧地形で低い窪地などに多く包含されており，出土遺物のほとんどは原位置を保つものではなく，丘陵の高所より流れ込んできたものと判断された。

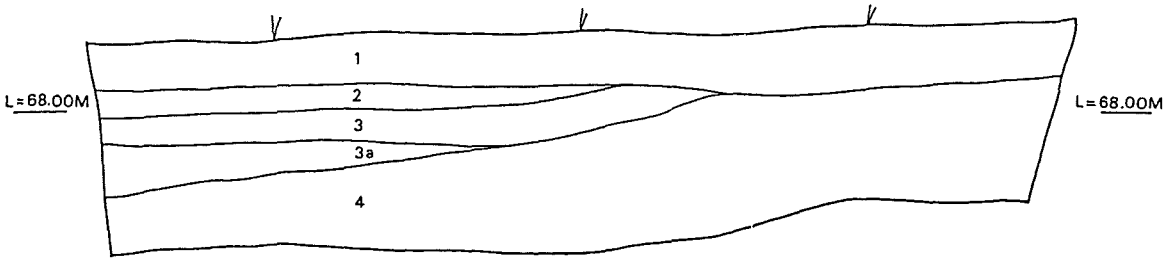
TP7　東壁

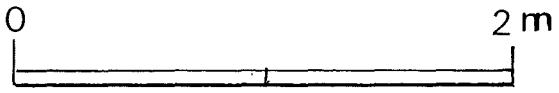


TP8　東壁



TP9　東壁





第5図　下木場遺跡土層図（s=1/30）

第V章　遺　構

1. 溝（第6図，第8図）

弥生時代後期の溝2条（SD2，SD3）と，時期不明の溝（SD1）を検出した。SD2，3は遺跡前面の小谷に向かって延びる。溝底は均一に傾斜するのではなく，急に傾斜が大きくなる部分を設けて，水の流れをよくするための成形が加えられている。自然地形ではなく，人為的な溝である。排水や，谷水田などへの用水の流路などの機能が考えられる。

(1) SD1（第8図）

調査区の西側より検出した。長軸を南北にとる。長さ約6m，幅約6～8m，深さ約0.5mである。覆土の色や土質よりみて新しい時期の溝と判断した。出土遺物はない。

(2) SD2（第6図）

調査区の東側より検出した。西から北東へ向かって延びる。長さ約12m，幅約0.6～1.0m，深さ約0.4mである。SD3を切っているので，SD2より新しい時期の溝である。弥生土器片25点，押型文土器片4点が出土した。

(3) SD3（第6図）

SD2に沿って延びる。SD2に切られているのでSD2よりも古い時期の溝である。残存する長さは約6m，幅約0.7m，深さ約0.1mである。覆土中より弥生土器片8点が出土した。

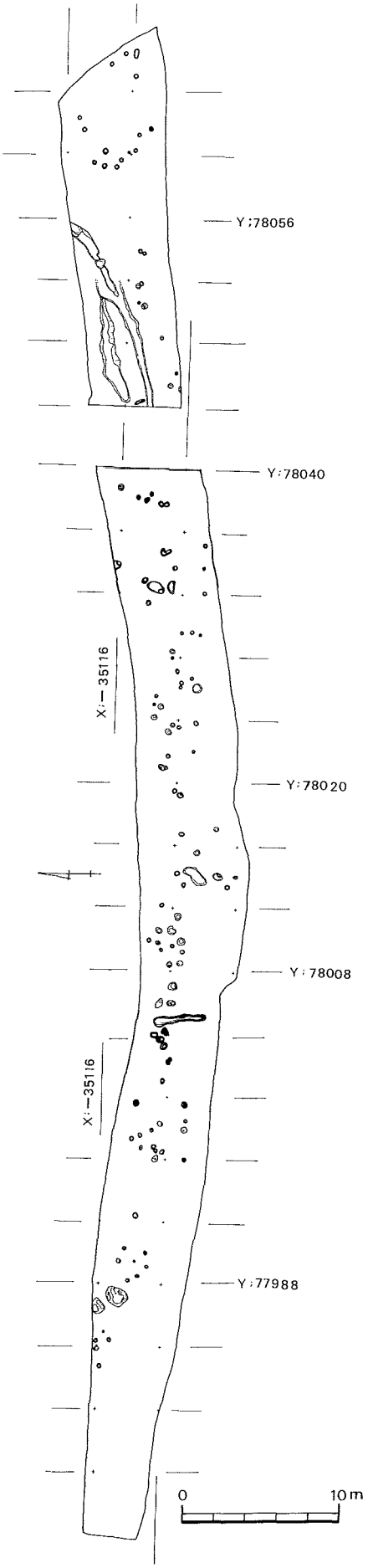
2. 土坑

(1) SK1（第9図）

調査区の西側で検出した。不整形の土坑である。長軸約2.8m，短軸約2.3m，深さ約1.1mを測る。覆土は単一土層である。覆土中より弥生土器片1点が出土した。

(2) SK2（第10図）

調査区の西側で検出した。底を2段に堀込む土坑で，不整形をなす。長軸約1.7m，短軸約1.7m，深さは浅いところで約0.45m，深いところで約0.9mを測る。覆土は単一層である。覆土中より弥生土器片1点が出土



第6図　遺構配置図（s=1/400）

した。

(3) SK4（第11図）

調査区の中央部付近で検出した。不整形土坑である。長軸約3.3m，短軸約1.4m，深さ約0.75mを測る。覆土は単一層である。出土遺物はない。

(4) SK6（第13図）

調査区の東側で検出した。楕円形土坑である。長軸約2.2m，短軸約1.3m，深さ約0.4mを測る。南西部に直径約0.5m，深さ約0.65mの円形の小穴が穿たれる。出土遺物はない。

3. その他

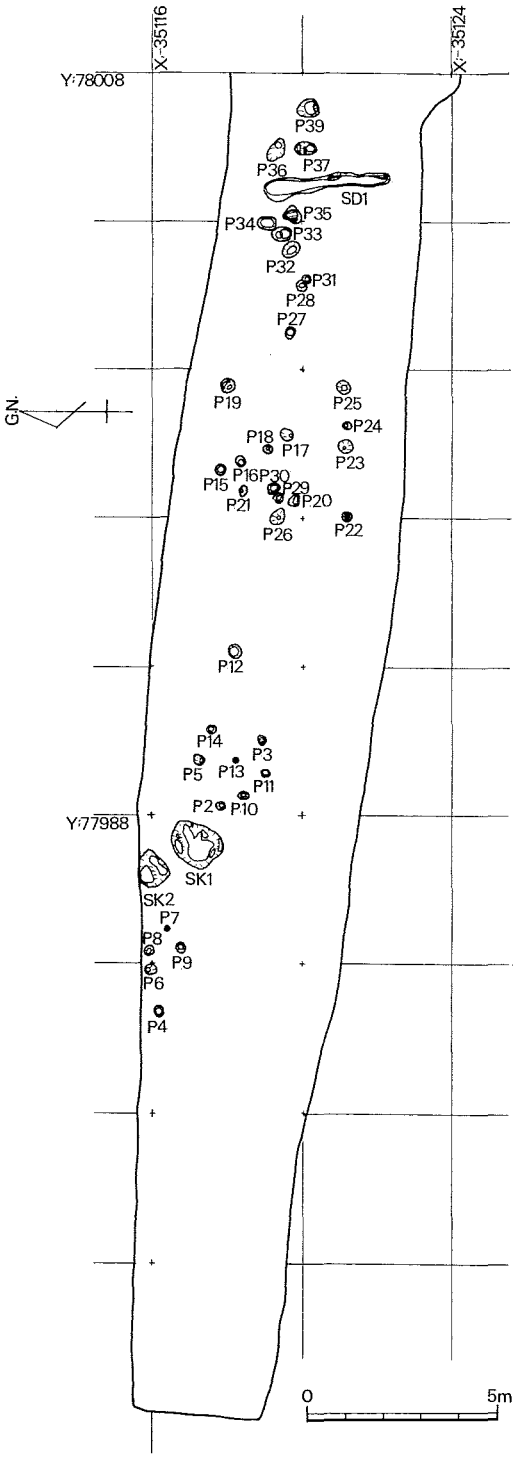
(1) 小穴（ピット）

調査区全体で121基のピットを検出した。建物跡としてまとまるものはない。すべてが円形のピットである。

遺構分布も調査区の中央部がやや密になる程度で，集中するような傾向は見られず，散在する状況を示す。出土遺物がみられたものは15，16，17，19，25，28，29，36，90，93のピットである。

15，16から弥生土器片1点，17から弥生土器片2点，19から弥生土器片2点，25から弥生土器片1点，28から弥生後期の台付甕片1点，29から縄文晩期土器片1点，36から弥生後期土器片1点，90から弥生後期土器片1点，93から弥生後期土器片1点が出土した。

したがって，調査区から検出したSD2，3とピットのほとんどが弥生時代後期に埋没したと判断した。このことは，範囲確認調査でも同様であった。



第7図　調査区遺構配置図①（s=1/200）

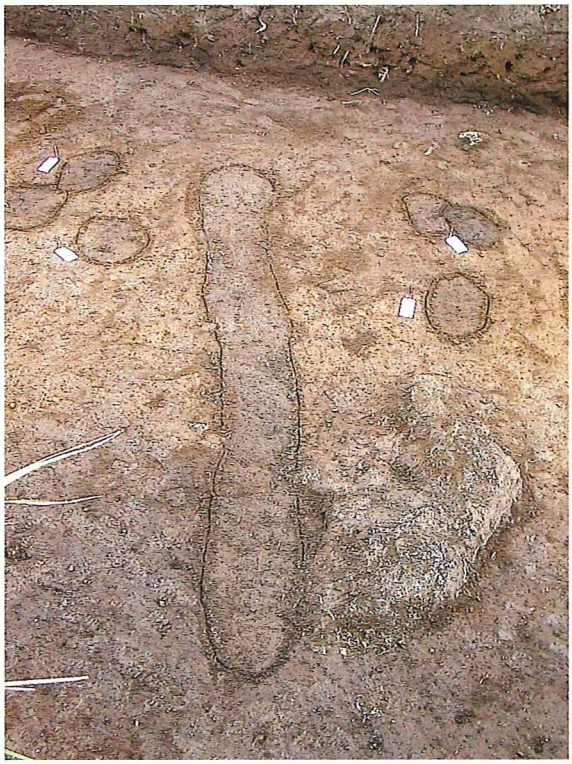
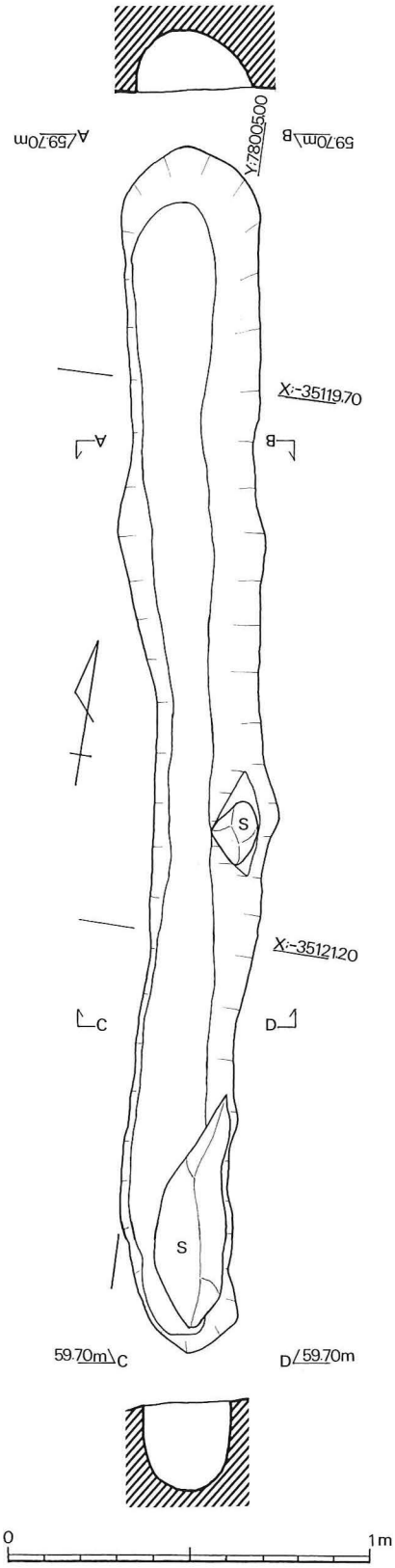
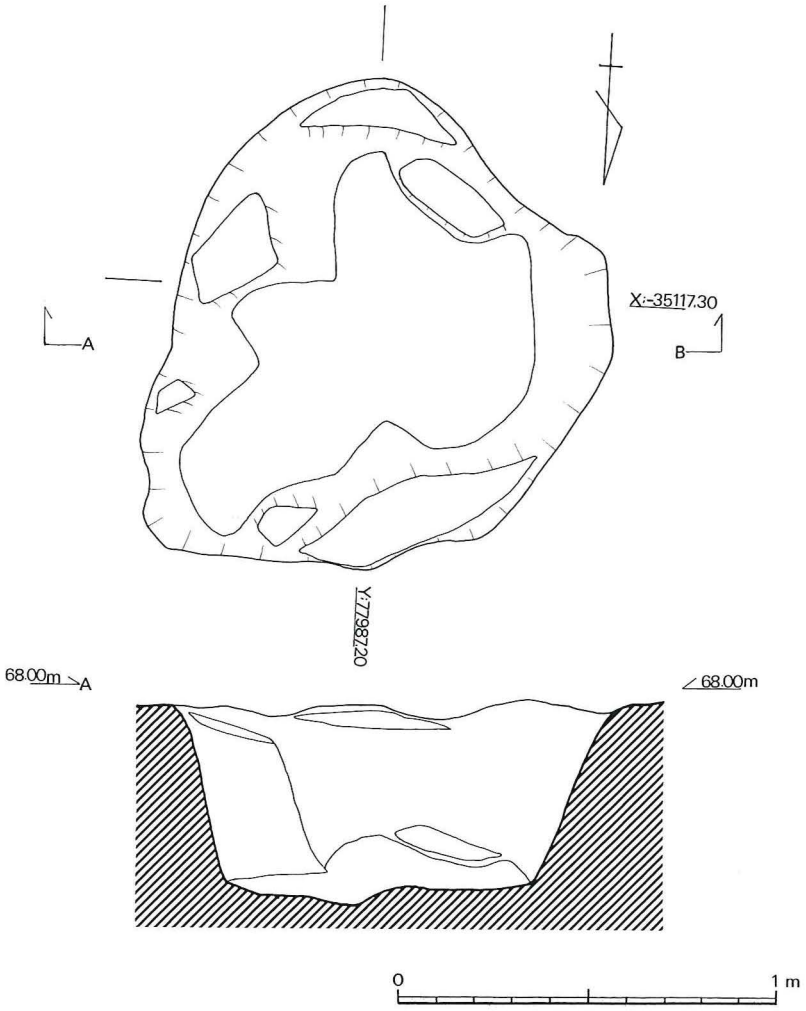


写真1　SD1　検出状況

写真2　SD1　半截状況



第8図　SD1　遺構実測図（s=1/20）



第9図　SK1　遺構実測図（s＝1/20）

写真3　SK1　完掘状況

第Ⅵ章　出土遺物

1. 縄文土器（第14図）

(1) 押型文土器（1～30）

楕円押型文土器（1～7），格子目押型文土器（8～14），山形押型文土器（15～29）がある。

①楕円押型文土器

いずれも小さい楕円文（長径3～5㎜）を施す。器壁の厚さは0.8～1.3㎝ほどである。焼成はよい。

1は外へ開く口縁部で，内面の文様はない。口縁部外面は口縁下0.8㎝ほどのところから原体を回転させて施文している。回転方向は縦位である。内面は赤みがかった黄褐色で外面は黄褐色を呈す。胎土には白色あるいは赤色の火山粒などをはじめ，角閃石や石英粒，砂粒が多く混入している。3層出土。

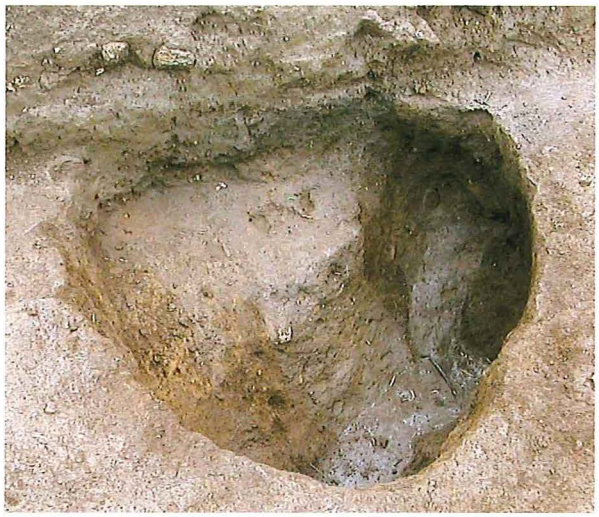


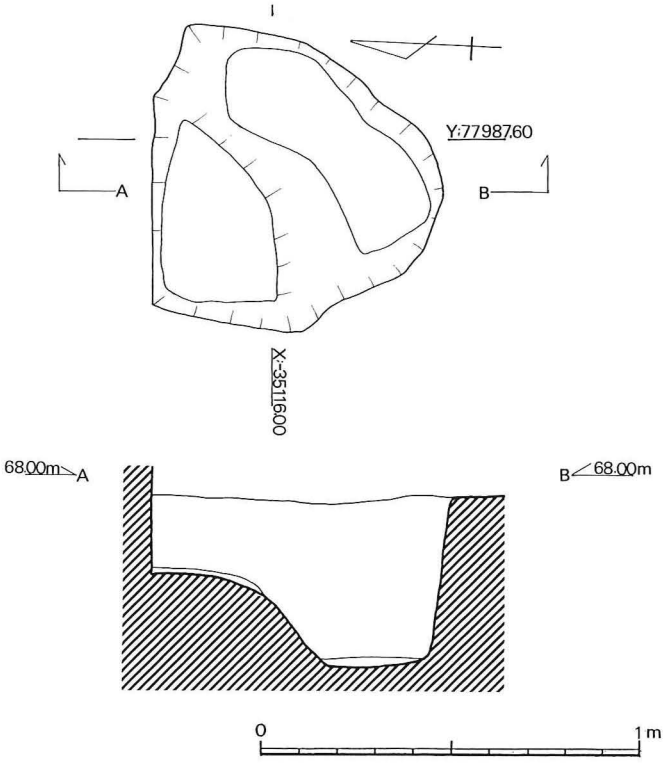
写真4　SK2　完掘状況

2も回転施文は斜位である。内外面ともに赤みがかった黄褐色である。胎土は1と同様である。

3は回転方向は縦位である。内面には指頭圧痕が残る。内面は赤みがかった黄褐色。外面は黄褐色である。白色砂，赤色砂を含む。3層出土。

4は原体を縦走させて施文する資料である。内外面は黄褐色で，胎土は1と同様である。

5も原体を縦走させて施文した押型文土器である。内外面黄褐色で，胎土に若干の砂粒が入る。4層出土。



第10図　SK2　遺構実測図（s＝1/20）

6は原体を縦走させて施文している。内外面は黄褐色で，胎土は1と同様である。4層出土。

7は原体の回転方向が斜行する資料である。内外面は明黄褐色で，胎土は1と同様である。3層出土。

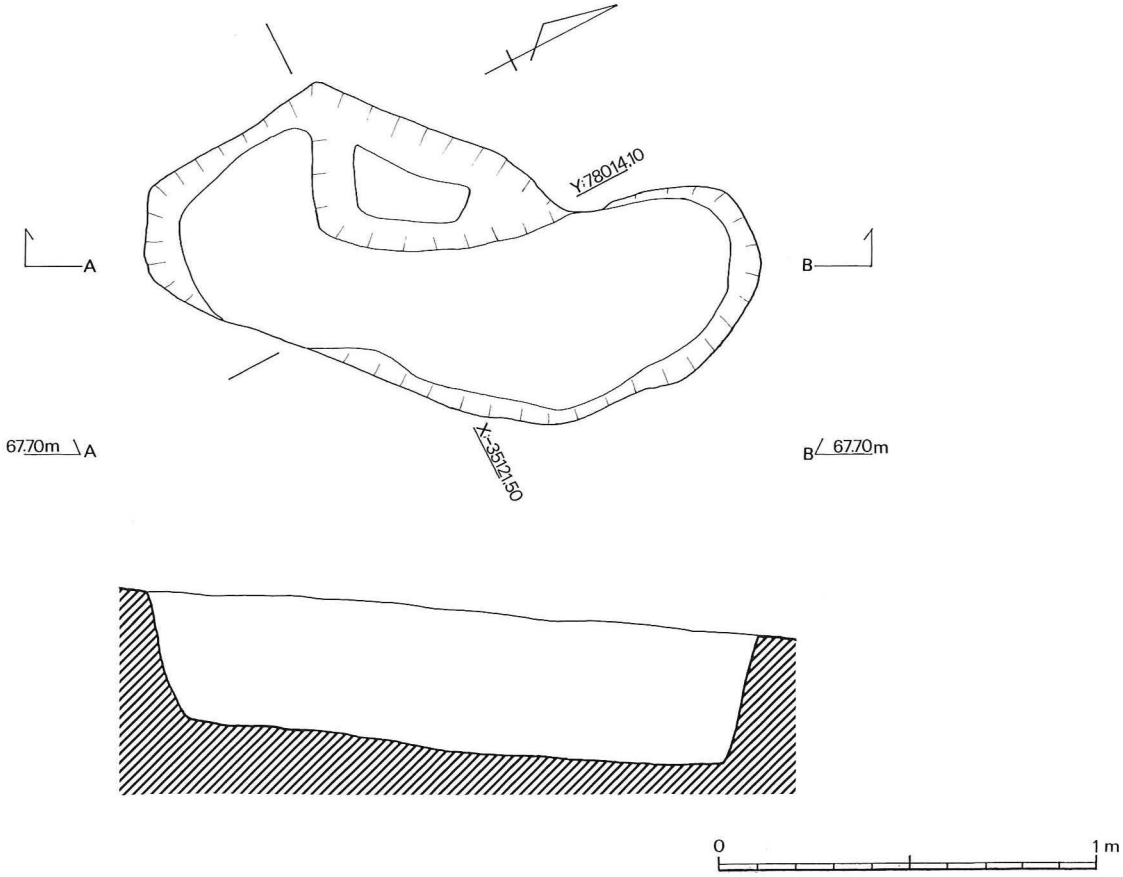
②格子目押型文土器

いずれも1辺が3～4㎜の格子目文を施す。器壁の厚さは1.3～1.8㎝と楕円押型文土器より厚い。焼成はよい。

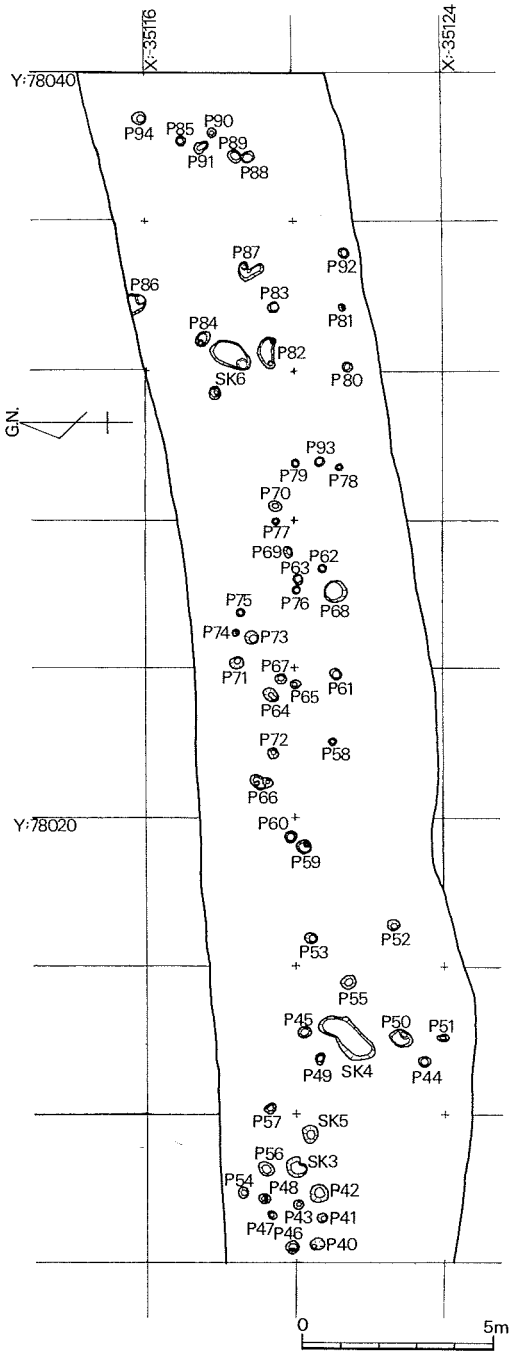
8は外へ開く口縁部の資料である。内面の文様はない。原体を斜に回転させている。内外面は明黄褐色で，胎土には砂粒が混じる。4層出土。**9**も外へ開く口縁部の資料である。

写真5　SK4　検出状況

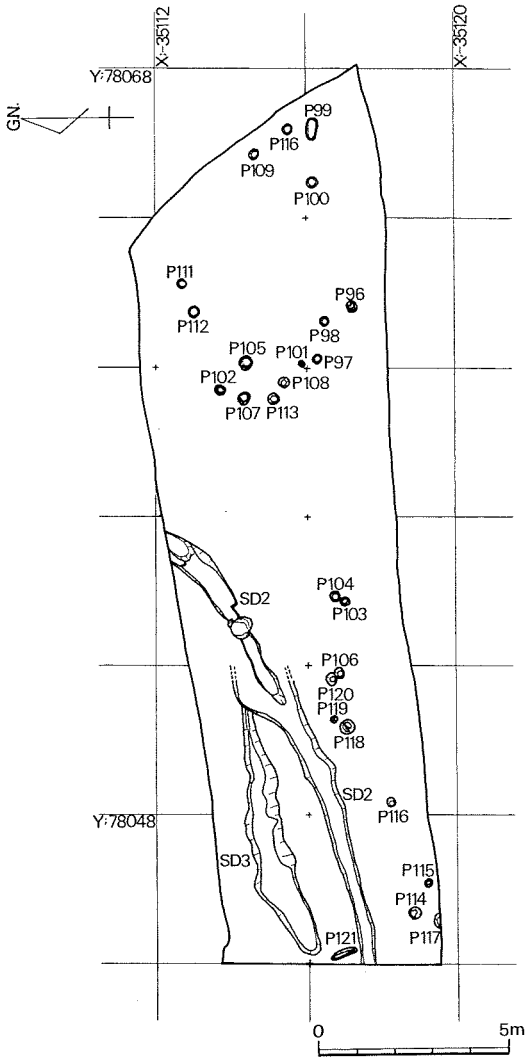
写真6　SK4　完掘状況



第11図　SK4　遺構実測図（s=1/20）



第12図－1　調査区遺構配置図②（s=1/200）



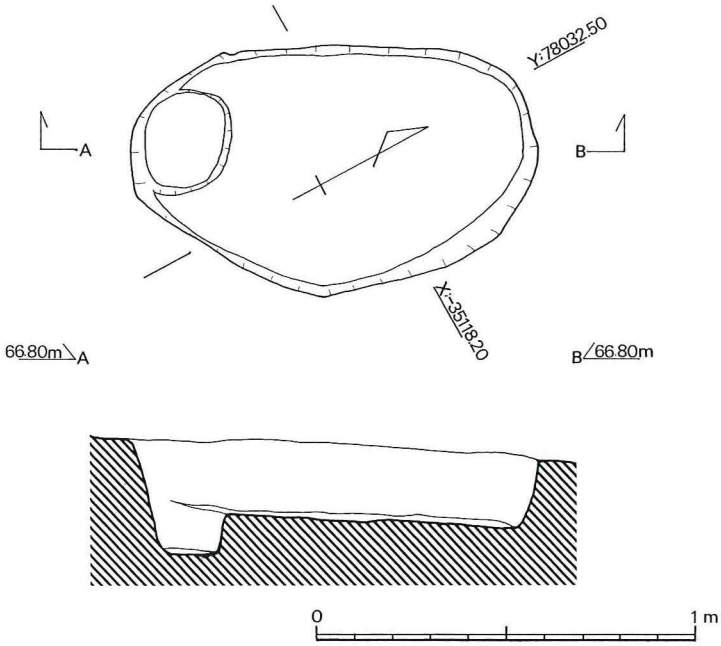
第12図－2　調査区遺構配置図③（s=1/200）

内面の文様はない。原体は縦に回転している。色調や胎土は8と同様である。3層出土。

11，12，13，14も原体が縦に回転され，施文するものである。胎土や色調は8と同様である。11，12，13，14は4層より出土。

③山形押型文土器

いずれも山形文の頂部の間隔が1cmほどで，高い山ではない。中には頂部の間隔が1.5cmと開き，山が低いものもある。文様の深さは浅いものが多い。器壁の厚さは0.8～1.3cmほどと楕円押型文の一群に近い。焼成はよい。**15**は外反する口縁部の資料である。外面は横に原体を回転させて山形文を施し，口縁部内面には長さ約1cmほどの原体条痕を縦に，約1cm間隔で施し，その下に横走の山形文を施文する。器壁の厚さは約1.2cmである。色調は外面は黄褐色，内面は明黄褐色である。胎土には角閃



第13図　SK6　遺構実測図（s＝1/20）

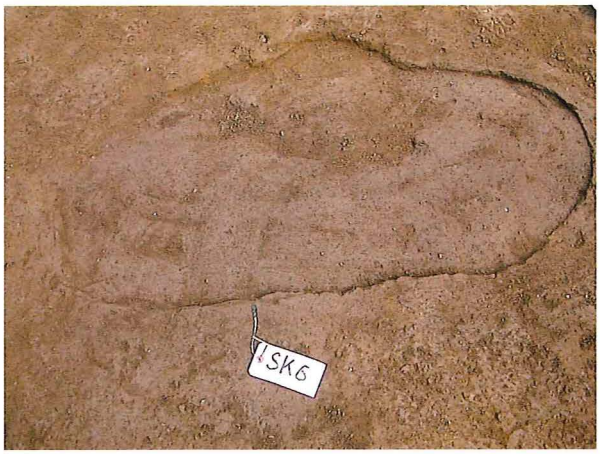


写真7　SK6　検出状況

写真8　SK6　半截状況

写真9　SK6　完掘状況

石，白色砂を含む。3層出土。**16**も外反する口縁部である。外面は縦に原体を回転させて山形文を施し，内面は口縁下2cmほどの幅で原体を横に回転させて施文している。内外面は明黄褐色。胎土に角閃石を含む。4層出土。**17**は原体を斜走させて施文している。色調は16に似る。火山起源の灰色粒子が胎土に混入する。4層出土。**18**は外反する口縁部である。外面に原体をやや斜めに回転させて施文している。内面は口縁下に2cmほどの文様帯をもって，山形文を横走させている。色調は赤みをおびた黄褐色で，胎土には角閃石や白色砂，砂粒など多く含む。4層出土。**19**は原体を斜めに回転させて施文する。角閃石，火山起源の白色砂，赤色砂を多く含む。色調は明黄褐色である。4層出土。**20**は原体を縦走させて施文している。色調は外面赤みをおびた黄褐色，内面は灰褐色である。胎土は19に似る。Ⅳ層出土。**21**も縦走する山形文である。色調は黄褐色で，胎土に赤色砂，角閃石，砂粒を含む。4層出土。**22**は原体を横に回転させて施文している。山が低く，施文も浅い。色調は明黄褐色。胎土に角閃石を含む。4層出土。**23**は横走する山形文を施す。胎土は19に似る。内外面は黄褐色。4層出土。**24**は縦走する山形文を施す。胎土は19に似る。内外面は明黄褐色。4層出土。25，26，27は横走する山形文を施す。胎土は19に似る。内面は黄褐色，内面は灰褐色である。**25**はⅣ層出土。**26**は3層より出土した。**28**は縦走する山形文を配する。胎土は19に似る。内外面の色調は黄褐色である。**30**は斜走する山形文を配する。4層出土。

(2) 縄文晩期土器（31，32）

31は口縁部の資料で，重弧を沈線で描く。内面はナデ調整である。胎土は精選されており，器壁も薄く，焼きも良い。色調は外は褐色，中は明褐色である。**32**は内外面に貝殻条痕を施した深鉢形土器である。内面の条痕はナデ消している。胎土は精選され，焼成も良好である。31も32も島原半島で礫石原式（黒川式）と呼ばれる土器群である。

2. 弥生土器，古式土師器，須恵器（第15図）

(1) 弥生土器

①複合口縁壺形土器（1，2）

個体は異なるが同型式である。色調は明黄橙色で，胎土は精選されており，つくりも丁寧である。

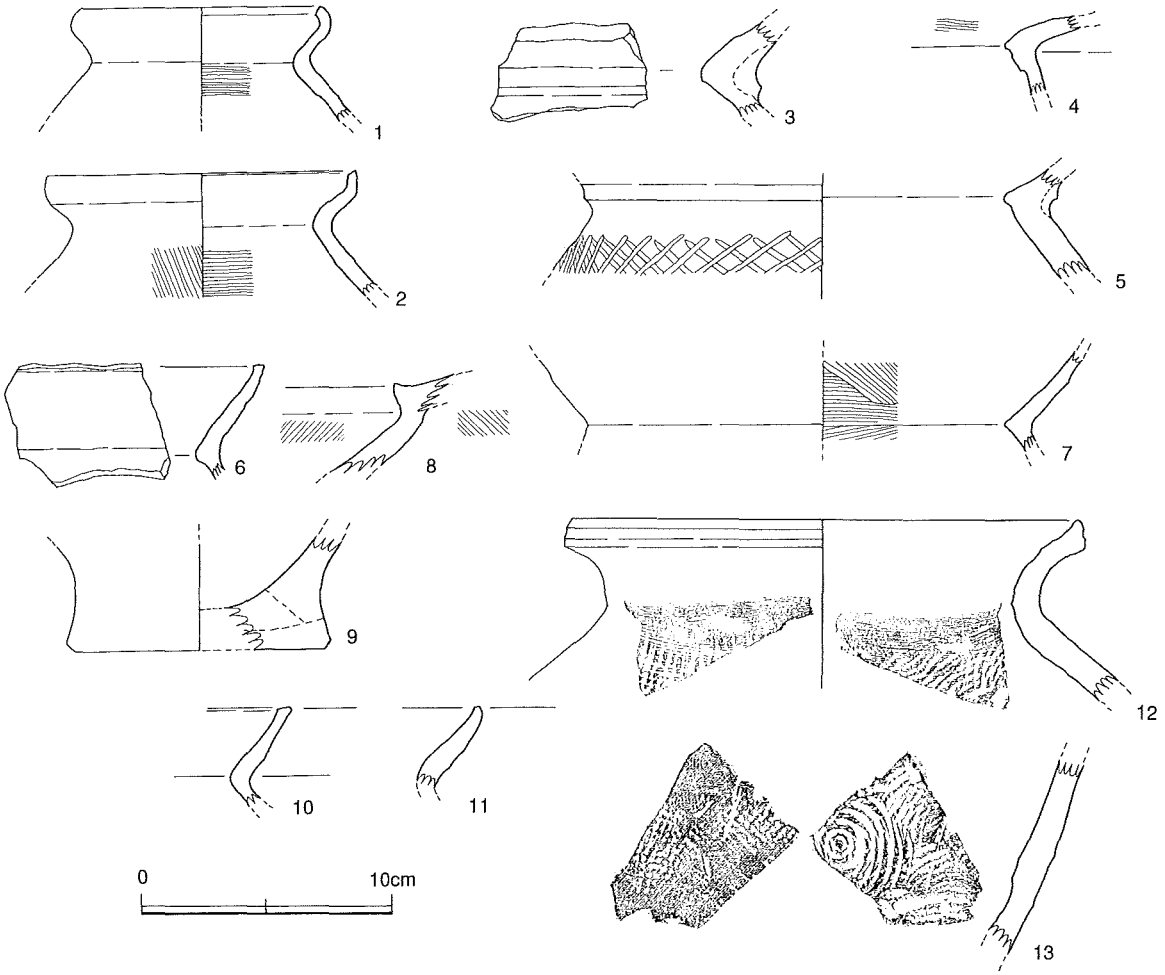
1は復元口径約10cmほどである。口唇部が内弯する。肩部外面には2と同様のハケメが入るが，口縁部も含めてヨコナデによって消されており，不明瞭である。内面には水引状の細いヨコナデが入る。**2**は1に比べて復元口径が12cmとやや大きい。口唇部の内弯も1に比べると弱い。調整は内面にヨコハケが入るほかは1と同様である。

②甕形土器（3～5）

突帯をもつもの（3，5）ともたないものがある。**3**は頸部に断面三角形のはりつけの突帯をもつ。内外面は赤橙色で赤色砂や砂粒を含む。焼成はややあまい。器面調整は風化で不明瞭である。

4は口縁部が強く外弯する。外は褐色で内面は黒褐色である。口縁部の内面にはヨコハケがみられる。胎土は1に似る。焼成も良好である。**5**は頸部に断面三角形の突帯がはりつくものである。肩部には格子目の暗文が施文されている。外面のみが薄橙色に発色しており，断面観察からも外面に近い部分が薄橙色に発色している。化粧土をかけて焼成したものと考えられる。化粧土を削ることによって，素地があらわれ，暗文となる効果をねらったものと思われる。

第14図　縄文土器実測図（s=1/3）



第15図　弥生土器・古式土師器・須恵器実測図（s=1/3）

③脚台付甕形土器（6，7，10，11）

6は口径を復元することはできなかったが，7より大きい個体である。色調は内外とも黄橙色で，胎土には角閃石や砂粒を含むが，精選されている。焼成はやや甘い。調整は風化のために不明瞭である。**7**は色調や胎土，焼成は6と同様である。口縁部内面にハケメ調整がみられる。

10，11は口縁部のみの資料である。体部の内面調整が不明であるため，古式土師器の可能性もあるが，焼成や胎土からみて脚台付甕形土器と判断した。

④高杯形土器

8は色調は明黄橙色で，胎土に火山起源の赤色粒を多く含む。付き内外面にハケメが観察される。焼成は良好である。

⑤低部（9）

9は突帯がつく甕形土器の底部と思われる。内面は黄橙色，外面は黄褐色である。胎土には角閃石や砂粒を含み，焼成はややあまい。

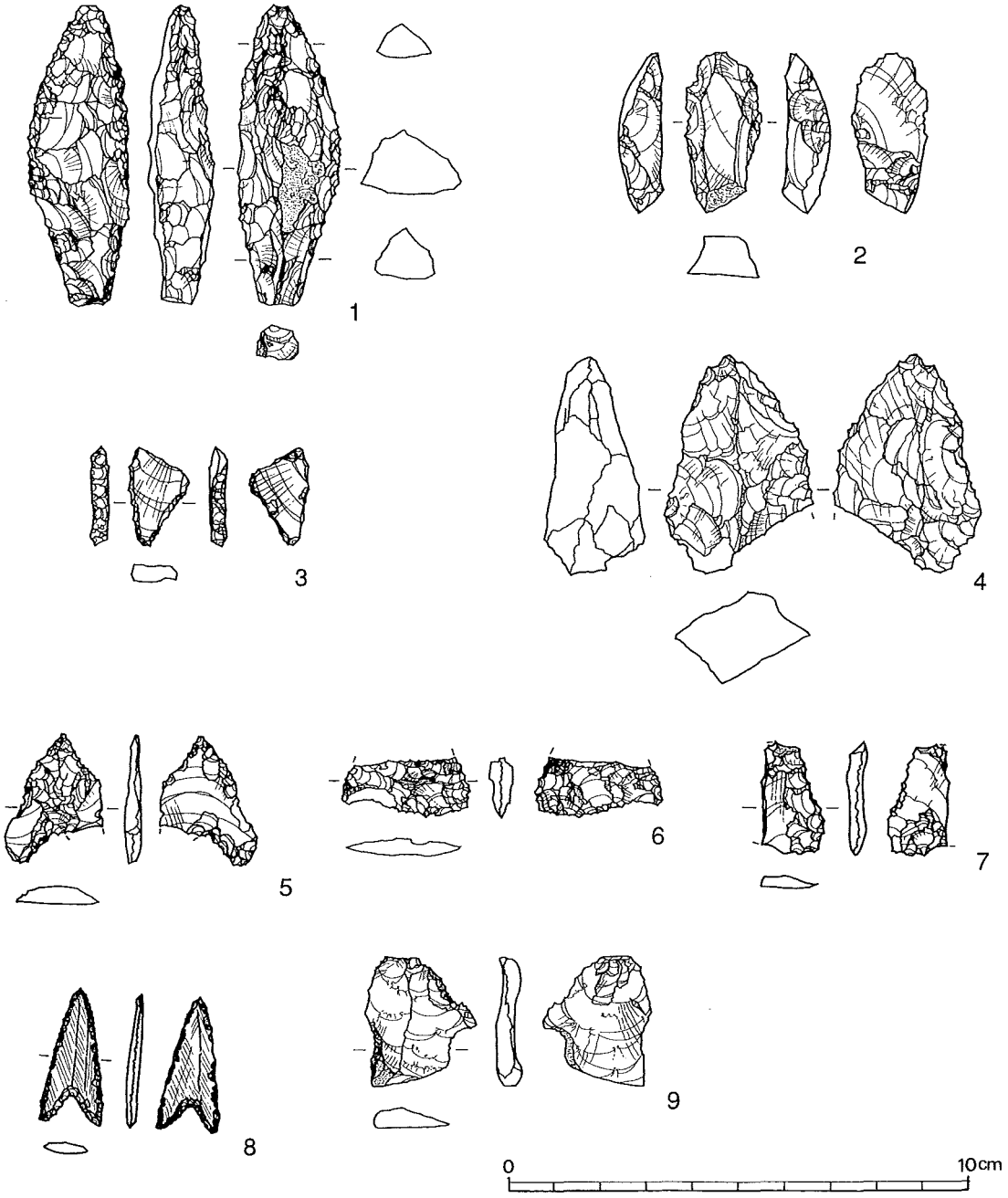
(2) 須恵器（12，13）

12は甕の口縁部，13は体部である。いずれも外面に格子目，内面に同心円状のタタキをもつ。焼成は良好である。

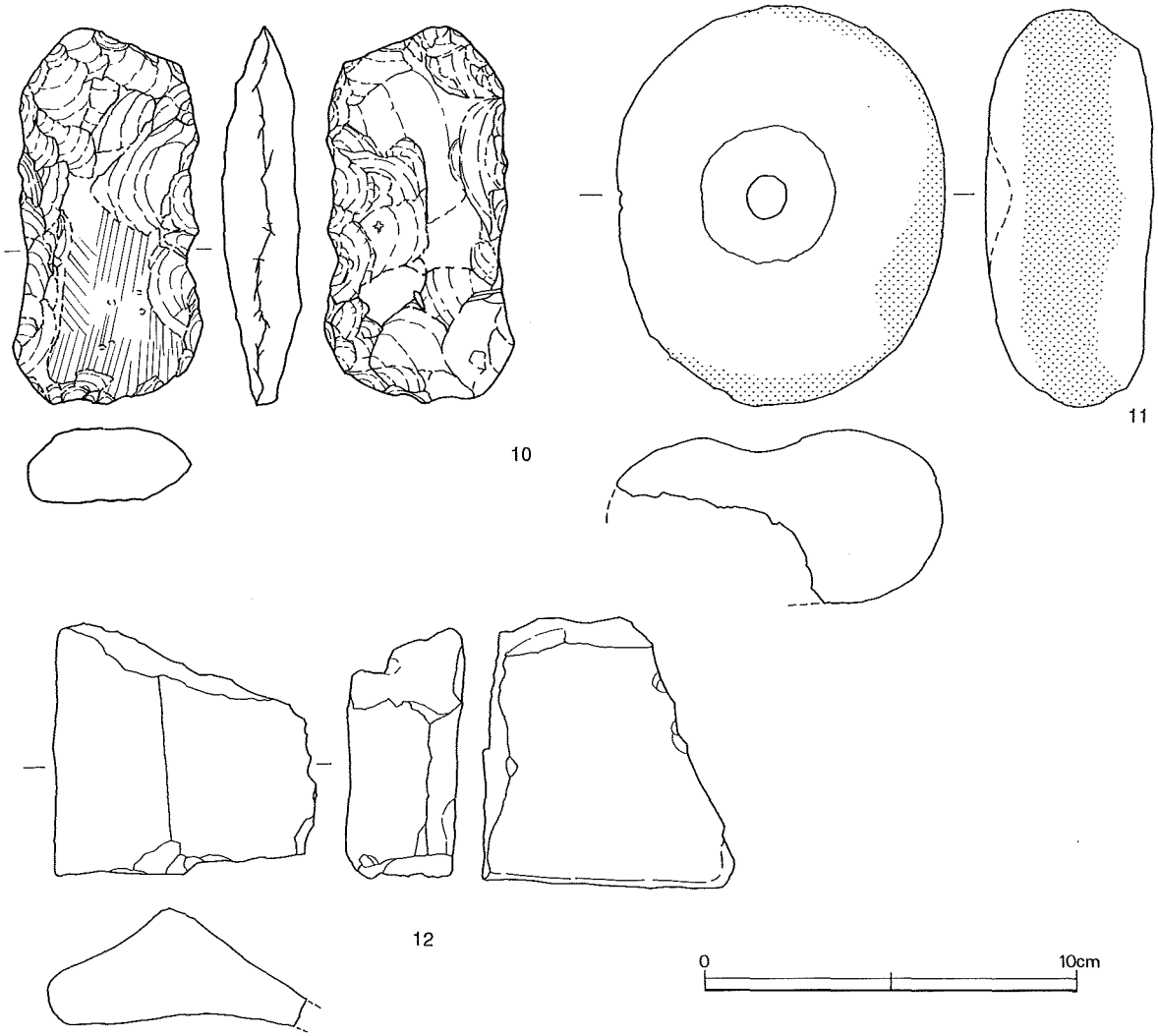
(3) 土器小結

下木場遺跡から出土した押型文土器の型式であるが，底部が出土していないので正確なところはわからないが，口縁部が外反することや，胴部に膨らみをもちそうなこと，楕円押型文が小振りで，粗大なものがみられないことなどからみて，東九州地方の型式でいうところの下菅生B式に併行する型式ではないかと考えられる。

また，下木場遺跡より出土した弥生後期土器は点数が少なく，破片が多いことから，時期決定の材料に欠けるが，脚台付甕形土器がA3類であることや，高杯形土器がA3類であることから後Ⅱ期（弥生後期中葉）くらいを想定しておきたい。(型式分類については後述する「総括」の頁を参照)



第16図　剥片石器実測図（s=2/3）



第17図　礫石器実測図（s=1/2）

3. 石器

1は三稜尖頭器である。最大長6.5㎝の黒曜石製である。調査区外より出土した。詳細は総括の頁を参照してもらいたい。**2**は台形石器もしくはナイフ形石器で，黒曜石製である。**3**はナイフ形石器で，黒曜石製。**4**は粗製の尖頭器で鹿児島県日東産の黒曜石製。4層より出土した。**5**，**6**，**7**は石鏃片で，黒曜石製。5，6は3層出土，7は表採である。**8**は局部磨製石鏃で，サヌカイト製。4層出土。**9**は剥片で，黒曜石製。4層出土である。**10**は打製石斧である。最大長10．2㎝，最大幅5㎝，重量140gである。**11**は敲石で，最大長10.7㎝，最大幅8.8㎝，重量480gである。**12**は砥石である。現存長7.2㎝，残存幅7.0㎝，重量150gである。

第Ⅶ章　総括

第1節　三稜尖頭器

今回の調査において11点の石器が出土した。黒曜石製が7点あり，その中に三稜尖頭器1点が含まれていた。九州以外では「角錐状石器」と呼ばれる石器を，九州では断面が三角形であることから「三稜尖頭器」と呼ぶ（註1）。この石器は福岡県の宗原遺跡のようにまとまって出土することはほとんどなく，今回のように単体やごく少数で出土することが一般的である。

三稜尖頭器の形態的な特徴としては，一端もしくは両端が尖鋭であること，ほぼ平坦な3面を持ち断面が三角形になることが挙げられる。また菱形をしたものやずんぐりむっくりとしたものは小型が多く，紡錘形をしたものは大型にのみ見られる。

素材には黒曜石が多く用いられるが，大型になると安山岩などその土地によって異なった石材が用いられることが多い。どの素材の場合でも厚みのあるものが用いられ，形態にはこだわらない。

製作方法としては，まず意図的に断面を三角形にするために，平坦な2面もしくは3面（註2）を作成する。これと同時に一端もしくは両端を尖鋭に加工する。このとき一端を明確な基部に加工する場合もある。形態を調整するために，面全体の平坦剥離や稜上調整（註3）を施す。側縁部に細かな加工が施され鋭くなる場合もあるが，片方の側縁部しか加工されてないものもあることから，形態を調整するためであり，使用目的というわけではない。このような加工技術によって，素材の形態にかかわらず目的に応じた形態の石器を作り出せるようになった。しかし「同じ母岩からの定型石器・剥片・石核がなく，接合例もない」（岩谷1996）ことや，まとまって出土することが少ないことから一般的には他の遺跡から持ち込まれたものと考えられている。

用途としては，槍先のような刺突具として使用されたと考えられている。側縁部を加工しているものよりも先端部の尖鋭を重点的に加工しているものが多いことや，先端部や基部の欠損例が側縁部のそれより多いことから，尖鋭な先端部に縦方向の負荷がかかるような使用法をしたものと考えられる。小型のものや基部を持つものは，「柄」に装着して使用したものとされている。形態を三角形にするのは，先端部を尖鋭に加工しやすく，その上厚みを持たせることが可能となり，頻繁な使用に耐えうる強度を持つことができるためと考えられる（註4）。

時期は細石器直前とされている。理由としては，ナイフ形石器や台形石器とともに出土することが挙げられる。また加工が面全体に及ぶこと，特に3面加工品においては，素材面が全く残らないほど綿密な加工が施される場合もあることから，「旧石器的な部分加工の石器製作から全面加工の縄文時代的な石器製作となった」（岩谷1996）と考えられるためである。このことから3面加工品は三稜尖頭器の最終的な形態とされている。

島原半島においても三稜尖頭器の出土が確認される。特徴としては，ほとんどが黒曜石製と安山岩製で占められ，黒曜石製が若干多い。黒曜石製は5㎝に満たない小型のものに多く見られ，紡錘形をした大型のものは安山岩製が多い。加工面数は2面加工が半数以上と最も多く，3面加工はその半数程度である。1面加工は確認できない。3面加工品は紡錘形をした大型のものには少なく，小型のものに多く見られる。

今回出土した三稜尖頭器は，長さ6.5㎝の黒曜石製である。形態は紡錘形で厚みがあり，一部素材

面が残る3面加工品である。一端に基部らしき部分があるが，その部分を基部として加工した形跡が見られないことから，本来は尖鋭な刺突部であり，何らかの負荷によって欠損したものである可能性が高い。

島原半島の出土品例と比較してみると，今回の出土品はこの地域では稀少なものであることがわかる。まず長さ5㎝以上の黒曜石製は少ない。また紡錘形のもののほとんどは安山岩製である。その上最も多く見られる2面加工ではなく3面加工が施されている。これらの特徴を持ち合わせる出土品はわずかにしか見当たらない。

島原半島の出土品例と比較したが，今回出土した石器が少なく三稜尖頭器も1点のみということもあり，明確な関連性はわからなかった。しかし今回の出土品の中に同様の加工が施されたものが他にないことから，他の遺跡で出土した三稜尖頭器同様，持ち込まれたものと考えられる。　（山田）

【註】

註1　「角錐状石器」との名称の使い分けや，認識基準の違いなど不明瞭な点が見られる。

註2　必ずしも素材剥離面を平坦に加工するわけではなく，平坦に近い面は加工せずに利用するため，加工面数に違いが出てくる。また面全体ではなく周囲だけを加工する場合もある。

註3　背面の稜から面的な平坦剥離調整をすること。

註4　偏平なものは強度が低いだけではなく，「加工技術が未発達であったことから『山稜形』になったという考えも成り立つ。」（岩谷1996）

【参考文献】

岩谷史記1996「三稜尖頭器」『第21回九州旧石器文化研究会　九州尖頭器石器群の様相　資料』

副島和明・伴耕一朗編1989「魚洗川B遺跡」『全国植樹祭会場造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会

田川肇編1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会

田川肇・副島和明編1985「百花台遺跡」長崎県教育委員会

水ノ江和同編1994「宗原遺跡」『県道久留米線・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告』5
福岡県教育委員会

森浩一・松藤和人編1994「百花台東遺跡－雲仙・普賢岳北麓の後期旧石器時代の遺跡調査－」
同志社大学文学部文化学科内考古学研究室

第2節　有明海西岸地域における弥生時代後期の土器

はじめに

本県本土部の弥生後期土器の研究は，松藤和人が，南高来郡口之津町三軒屋貝塚の報告書において，当該期の土器の整理研究をおこなった1970年代半ばと，宮崎貴夫が北高来郡森山町西ノ角遺跡や，南高来郡北有馬町今福遺跡の調査報告書において編年研究をおこなった1980年代半ばの研究しかない状態で，90年代は研究の空白期であった。この原因として，本県本土部の弥生後期遺跡が少ないことや，良好な遺存状態を示す遺跡となると、さらに少ないということが考えられる。筆者が本県の文化財保護部局に入って11年が過ぎようとしているが，本県本土部でこの間調査された弥生時代の住居跡は10軒にも満たない状況である。

本稿では，近年，県中央部に位置する大村市で，古墳時代初頭の住居跡より，良好な一括資料が出土したことや，熊本県での当該期土器の研究が進んだことに勢いをえて，松藤・宮崎両氏の先行研究を再度整理し，再考することによって，今後の研究の基礎となるデータを提示することを目的とする。

1　長崎県における弥生時代後期土器の研究史

先述したように松藤は1975年に口之津三軒屋貝塚の報告書のなかで，島原半島の弥生時代の土器を集成検討し，この地域の弥生後期土器をはじめて明らかにした。

次に宮崎は今福遺跡の調査報告をおこなう中で，当該期の土器の分析研究と編年を行っている。松藤の研究は様式設定までの土器編年にはいたらなかったが，宮崎の研究は形式ごとの型式変化を明らかにし，様式の設定までいたっている。資料的には良好な一括遺物が乏しく，型式学で補いながらの苦心の仕事であった。宮崎の編年は調査担当者として出土遺物の分析を通して最大限の成果を提示したものであり，高く評価できる。しかしながら，本県本土部でのその後の資料蓄積が進まなかったことが原因で，宮崎の提示した編年案は検証されることなく，現在に至っている。

2　形式分類

宮崎貴夫は今福遺跡の調査報告書のなかで，台付甕，大甕，甕，無頸壺，直口壺，広口壺，複合口縁壺，鉢，高杯，支脚などに形式分類し，さらに細分して型式変化を追っている。

本稿では宮崎が対象とした形式すべてを扱うことはできない。形式ごとの資料数が不十分なことが大きな理由である。ここでは，型式変化が比較的捉えやすく，資料数も比較的多い，脚台付甕形土器，高杯形土器の2形式に絞って，型式変化を追うこととする。

3　各形式の変遷

(1) 脚台付甕形土器

①研究史

松藤和人は脚台付甕形土器を甕形土器C類として，おもに口唇部の形状に着目して3型式（Ca・Cb・Cc）に細分した。しかし，口唇部という局部的な変化に限定したため，全体的な型式変化はとらえきれていない。

宮崎貴夫は逆「L」字形に口縁が折れるものをⅠ類，「く」字形に口縁が外反するものをⅡ類とし，それぞれをさらに3型式（A～C）と8型式（A～H）に細分した。宮崎の型式分類は，松藤と同じように口縁部の変化に着目しているが，細分された型式数が多いため，型式変化を大まかに捉えにくいところがある。

②型式分類と型式変化（第18図）

本稿では脚台付甕形土器を胴部に張りがあるもの（A類甕）と胴部に張りがないもの（B類甕）に分ける。脚台付甕形土器の型式変化は漸移的であるため，型式変化がとらえにくいうえ完形の資料に恵まれないことが，さらに型式変化を捉えにくくしている。ここでは熊本県の研究などを参考にして，おおまかな変化の特徴を列記する。その際に，A類甕，B類甕共通にみられる型式変化と，A類甕のみに見られる型式変化とに分けて記述する。

A類甕，B類甕に共通する型式変化は下記のようなものである。

（ア）器高に占める口縁部の高さが低いものが古く，高いものが新しい。このことは，口縁部の外反の度合いが強いものが古く，弱いものが新しいとも言え，外観の印象としては，新しい時期のものほど口縁部が立ってくる傾向が窺える。

（イ）底部の高さが低いものが古く，高いものが新しい。また，底部断面の厚さが厚いもの，さらに脚部の裾の開きが弱いものが古く，底部断面が薄く，脚部の開きが大きいものが新しいといえる。

（ウ）新しくなると脚台付甕形土器の器高が次第に高くなる。

次に，A類甕のみの型式変化としては下記のようなことがいえる。

（エ）胴部最大径が胴部の器高の下から3分の2ほどにあるものが古く，胴部最大径が胴部の器高の下から5分の3ほどにあるものが新しい。

③型式の細分と変遷

A類甕は前述のような型式変化の特徴からみて，さらにA1，A2，A3，A4の4型式に細分が可能で，型式学的にA1→A2→A3→A4と変遷すると予想される。

B類甕もさらにB1，B2，B3，B4の4型式に細分が可能で，型式学的にB1→B2→B3→B4へと変遷するものと予想される。

(2) 高坏形土器

①研究史

松藤は高杯形土器をA～Cの3型式に分類した。このうちA類は熊本県の土器研究の成果に照らすと，中期末の型式である（原田1999）ため，対象から除外する。一方，宮崎はA～Fの6型式に分類した。

②型式分類（第18図）

ここでは松藤，宮崎の分類を参考に4型式に分類した。結果的に，おおむね宮崎の分類に合致することとなった。

（ア）高杯A類　松藤のB類，宮崎のA類。在地系である。

（イ）高杯B類　宮崎のB類。在地系である。

（ウ）高杯C類　松藤のC類　宮崎のC類。在地系である。

（エ）高杯D類　宮崎のD類　宮崎は「形態的には北九州地域の系統」とする（宮崎1986）。

（オ）高杯E類　北部九州地域系の外来土器である。

③型式の細分と変遷（第18図）

高杯A類について宮崎は後期を通じて継続すると考えているが，後述する今福遺跡C9，10区の住居跡出土資料には高杯A類がみられないことから，この時期には消失した可能性がある。宮崎の編年表でも後Ⅴ期に設定された高杯A類は，口縁部が長大化し，水平に延びるものであることから，後Ⅳ期

に設定された型式と同じか，わずかに前後する時期のものではないかと考える。現状で1型式を設定できない。熊本県での研究によると，「口縁部の長大化」（原田1999）や「口縁が水平に開くもの」から「外弯しながら斜め上に伸び」「さらに「口縁部は長く伸びる傾向にある」という。このことから高杯A類はさらにA1，A2，A3と細分され，型式学的にA1→A2→A3と変化すると予想される。

高杯B類はさらにB1，B2に細分され，B1→B2と型式変化するとみられる。高杯C類はC1，C2と細分され，C1→C2と型式変化すると予想される。高杯D類，高杯E類については資料数が少なく明らかではない。

4　様式の設定に向けて

本来であれば，各型式の土器群の共伴関係を捉えて様式として設定すべきであるが，一括資料に恵まれず，一括資料とみられる土器群も量が少ないため，形式ごとの型式組列を提示できない現状では，編年作業は困難といわねばならない。しかし，いつまでも資料不足を嘆いていても仕方がないので，先述した脚台付甕形土器と高杯形土器の組み合わせから判断して，同時期と予想される資料まとめるという作業をおこなう。

(1) 中期末

西ノ角遺跡遺跡のB－14号土坑一括資料をこの時期に設定しておく。共伴した壺形土器は中期末の型式である。脚台付甕形土器は胴部最大径が上位にあるA1類，B1類のみである。高杯形土器が明確ではないが，L字形に口縁部が屈曲する高杯形土器らしき資料があり，高杯A1類より古い。高杯A1類は存在しないが，セットになると想定される。

(2) ②後期Ⅰ期

今福遺跡のB6区住居跡一括資料をこの時期に設定する。脚台付甕形土器はA2類とB2類1点づつである。高杯形土器はA2類のみである。脚台も器高が低く，脚裾も外に開かない型式学的に古い資料である。

同時期の資料としては西ノ角遺跡のA7区第4号ピット一括資料がある。西ノ角の資料は脚台付甕形土器はA2類の1点とB2類1点である。

(3) 後期Ⅱ期

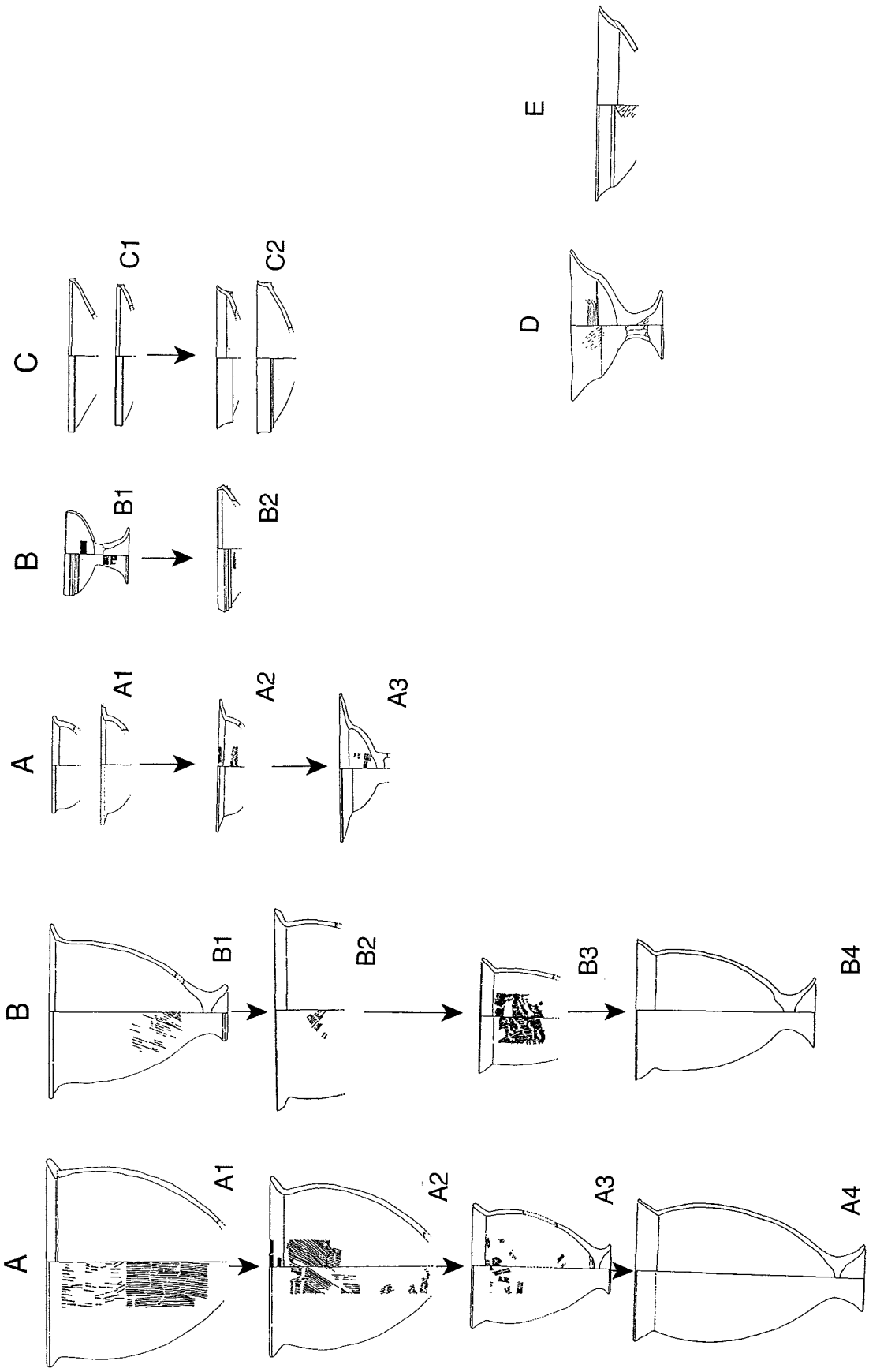
西ノ角住居跡一括資料をこの時期に設定する。脚台付甕形土器はA3類のみ2点である。高杯形土器はE類が出土する。同時期の資料として一野遺跡第2号住居跡の資料，西ノ角遺跡のA15区4号ピット出土遺物があげられる。台付甕形土器はA3類が2点存在する。しかしB類甕はB2類の資料のみで2点がある。実測図が不備なため十分な検討ができない点や，ここの資料も高杯形土器が欠落するなど資料的不備は否めない。西ノ角A15区4号ピット資料はA3類1点，B3類1点である。ここも高杯形土器が欠落している。

(4) 後期Ⅲ期

今福遺跡のC9，10区住居跡一括資料をこの時期に設定する。脚台付甕形土器は，A4類のみ2点である。高杯形土器はC1類3点とC2類2点である。同時期の遺構一括資料が現状では不足している。

(5) 古墳時代初頭

大村市冷泉遺跡の住居跡一括資料をこの時期に設定する。台付甕はA3類1点，A4類3点，B4類2点，高杯形土器はD類3点である。



第18図　脚台付甕形土器の型式変化と高杯形土器の型式と型式変化

5　有明海西岸地域の脚台付甕形土器と高杯形土器

ここでは本県本土部のうち，脚台付甕形土器を使用していた県南部に限って，出土した後期の脚台付甕形土器と高杯形土器を集成し，それぞれの型式を検討する。

(1) 川棚町五反田遺跡

東彼杵郡川棚町にある石棺墓群からなる遺跡である。脚台付甕形土器はないが，高杯E類が出土している。

(2) 東彼杵町白井川遺跡

東彼杵郡東彼杵町に存在する。3基の住居跡が検出されている。そのうち第3号住居跡より，脚台付甕形土器A4類，B3類，高杯形土器E類が出土している。第2号住居跡からは脚台付甕形土器B3類と高杯形土器E類が出土している。第1号住居跡でも高杯形土器E類が出土している。

(3) 東彼杵町宮田A遺跡

東彼杵郡東彼杵町にある。弥生土器が集中して出土する地点があった。脚台付甕形土器はA1，A2，B1，B2類が存在する。高杯形土器を欠く。

(4) 諫早市上原貝塚

諫早市松里町にある貝塚である。秀島貞康により，資料紹介がおこなわれている。脚台付甕形土器はA2類とA3類，高杯形土器はA2類とE類が認められる。

(5) 加津佐町永瀬貝塚

南高来郡加津佐町にあった貝塚である。松藤和人によって資料紹介されている。脚台付甕形土器はB2類のみで，高杯形土器はA3類とB2類である。

(6) 口之津町辻貝塚

南高来郡口之津町にある貝塚である。長崎県教委により，1991年（平成3）と1998年（平成10）の2度の緊急調査がおこなわれている。1991年は地点を変えて2次にわたる調査が行われている。ここでは1991年1次，1991年2次，1998年調査と呼んでおく。

1991年1次調査では脚台付甕形土器はA2，A3，A4，B2類が出土している。高杯形土器はB2類である。2次調査では脚台付甕形土器はA4，B3，B4類が認められ，高杯形はC2類のみである。報告者も両地点での高杯形土器の様相の違いを報告書内で指摘しているが，脚台付甕形土器の様相も異なっており，時期差と考えられる。

以上，県内南部から出土した後期土器を脚台付甕形土器と高杯形土器を中心に概観したが，前述した型式分類に沿って，各型式が存在することがわかる。

6　様式の設定（第19図）

4の項で一括資料をもとに様式案を提示したが，ここでは前述した県内の弥生後期の資料を加えて，先に提示した様式の妥当性を検証してみたい。資料としては地域性を考慮し，島原半島に位置する辻貝塚の各調査資料と，未発表であるが，国見町十園遺跡の資料および永瀬貝塚の資料を用いる。しかし再度強調しなくてはならないのは資料数が少ないことや，包含層出土資料や貝塚出土資料を使用せざるをえないため，資料的には不十分であることである。

	脚台付甕形土器A類				脚台付甕形土器B類				高杯形土器A類			高杯形土器B類		高杯形土器C類		高杯形土器D類	高杯形土器E類
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	A1	A2	A3	B1	B2	C1	C2		
西ノ角遺跡B14号土坑	○				○												
西ノ角遺跡A7－4号ピット		○															
今福遺跡B6区住居跡		○				○				○							
辻貝塚1次調査1991		○	○			◎							○				
永瀬貝塚			○		○	◎					○	○	○				
一野遺跡第2号住居跡			○			○											
辻貝塚1998			○			○	○			○	○				○		
西ノ角住居跡			○				○										○
西ノ角A15－4号ピット			○				○										
十園遺跡26SD1			○				○										○
十園遺跡26区SD02			○				○	○								○	○
今福遺跡C9，10区住居跡				○				○						○	○		
辻貝塚2次調査1991				○			○	○							○		
十園遺跡27SB01				○				○									
冷泉遺跡住居跡			○	○				○								○	

◎は出土数が多い資料

【註】

未公表の国見町十園遺跡出土資料については，同町教育委員会の辻田直人氏，竹中哲朗氏の御配慮により資料提供をうけた。

【文　献】

宮崎貴夫編1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集　長崎県教育委員会

宮崎貴夫編1984『今福遺跡』長崎県文化財調査報告書第68集　長崎県教育委員会

宮崎貴夫編1985『今福遺跡』長崎県文化財調査報告書第77集　長崎県教育委員会

宮崎貴夫編1986『今福遺跡』長崎県文化財調査報告書第84集　長崎県教育委員会

村川逸朗編1991『辻貝塚』加津佐町文化財調査報告書第1集　加津佐町教育委員会

藤田和裕編1998『辻貝塚Ⅱ』加津佐町文化財調査報告書第2集　加津佐町教育委員会

松藤和人編1975『口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告』百人委員会埋蔵文化財報告第5集　百人委員会

大野安生，松川憲毅，松尾尚哉編『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』Vol.3　大村市文化財調査報告書第25集　大村市教育委員会

第19図　各遺跡の脚台付甕形土器と高杯形土器

第19図に，脚台付甕形土器A類の変化をもとに画期を設定した。これをみるかぎり，前述した後期Ⅰ，Ⅱ期，Ⅲ期の各様式はさほど矛盾なく成立するようである。とくに辻貝塚において調査地点が異なる3箇所の資料群が3時期に分かれることは，ここまでの様式設定が時期決定の手がかりとなることを示しているようである。

同図をみると脚台付甕形土器B類の変遷に着目すれば，後期Ⅱ期のなかで，もう1時期設定できそうな様相がみてとれる。永瀬貝塚，一野遺跡第2号住居跡，辻貝塚1998年の一群と，西ノ角遺跡の住居とA15－4号ピット，十園遺跡のSD1，SD2の一群である。高杯形土器についても前者にはA類，B類が共伴し，後者にはD類，E類が共伴している。現状では先に記した3期区分を改め，後期Ⅱ期を2分し，後期のⅠ～Ⅳ期の4期区分説を提案しておく。

7　おわりに

ここまで，本県の有明海西岸地域の弥生時代後期の土器には後期Ⅰ期，Ⅱ期，Ⅲ期，Ⅳ期の4つの様式があることを指摘してきた。それぞれを後期前葉，中葉，後葉，終末と呼び変えることも可能である。正確な時期決定は他地域との資料比較を経て，併行関係を検討し，共通の様式幅のなかで使用すべきであろうと考える。

最後に，脚台付甕形土器と高杯形土器のセット関係をまとめると，後期Ⅰ期は脚台付甕形土器A2類とB2類の組み合わせが土器構成の主体となる時期で，高杯形土器はA2類，B類が伴う。

後期Ⅱ期は脚台付甕形土器A3類，B2類が主体となる時期で，高杯形土器はA2，A3類，B類，C類が伴う。

後期Ⅲ期は脚台付甕形土器Aは依然，3類が主体だが，BはB3類が主体となる。また，高杯形土器に旧来のA類，B類にかわり，新来のD類，E類が加わる。

後期Ⅳ期は脚台付甕形土器はA，Bともに4類が主体となり，高杯形土器は引き続きC，D，E類が用いられるとまとめられる。(古門)

図　　版

写真10　剥片石器①

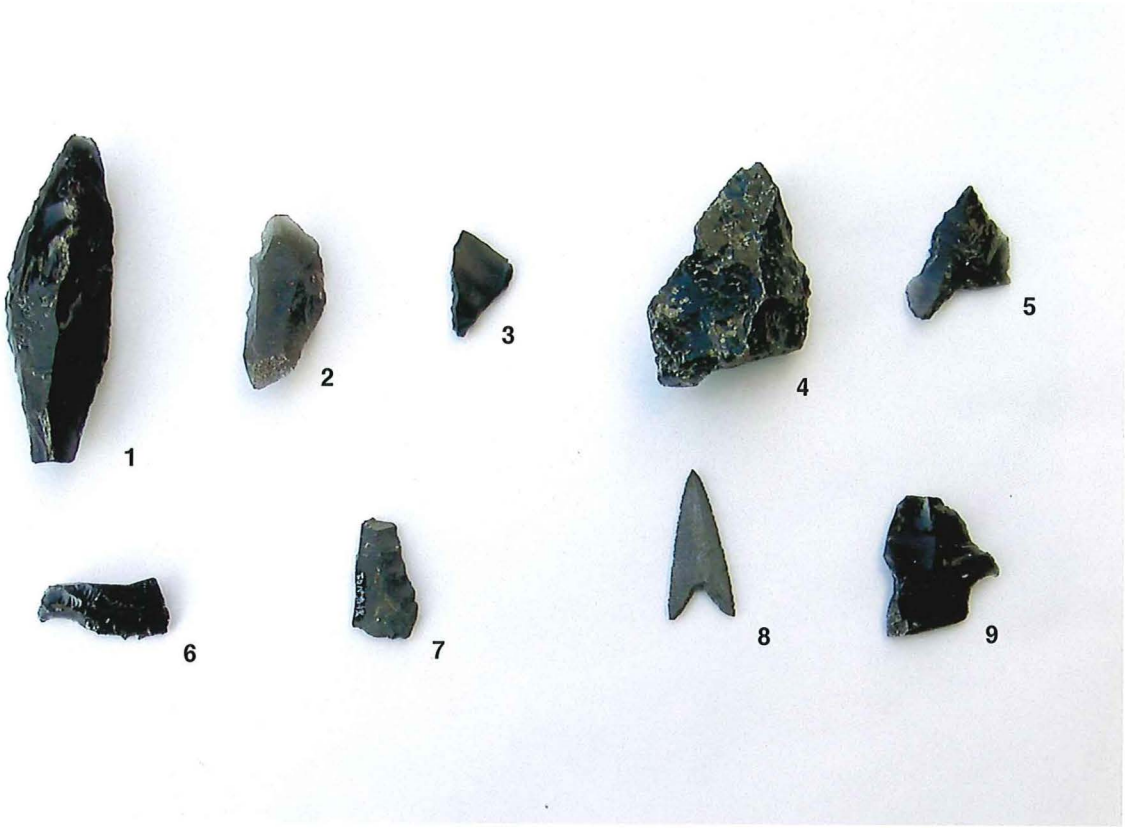


写真11　剥片石器②

写真12　礫石器①

写真13　礫石器②

写真14　土器①

写真15　土器②

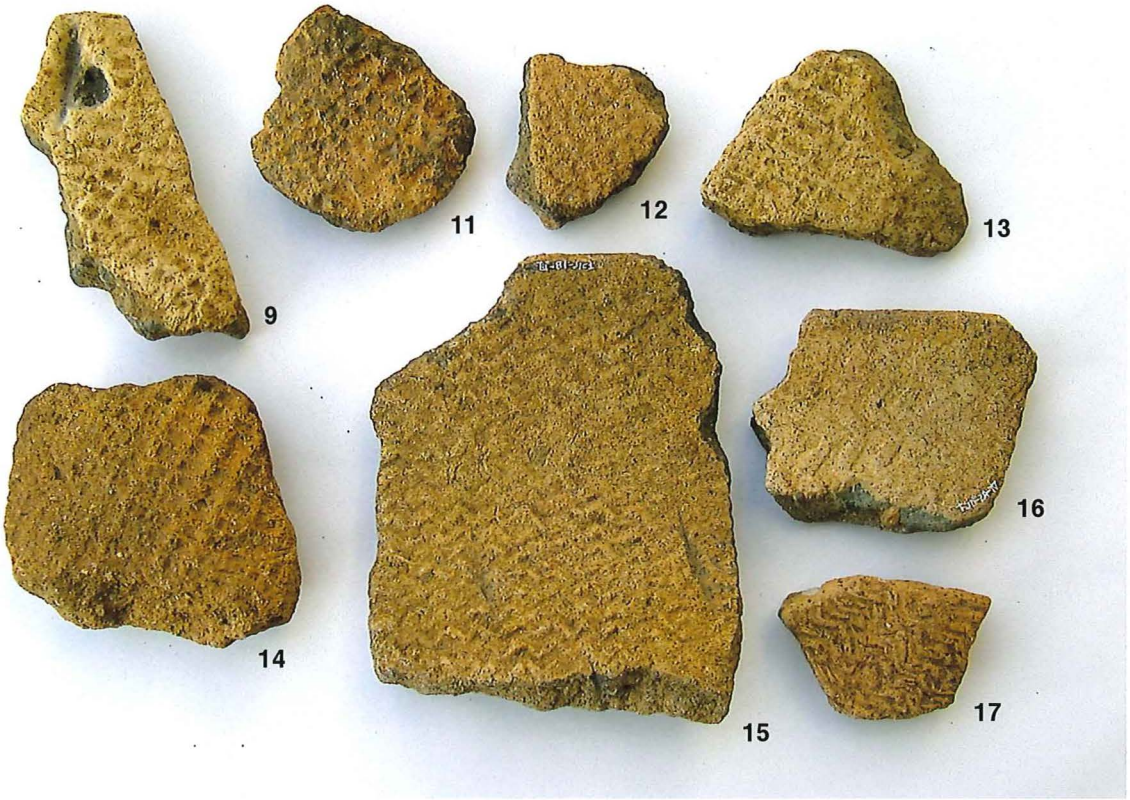


写真16　土器③

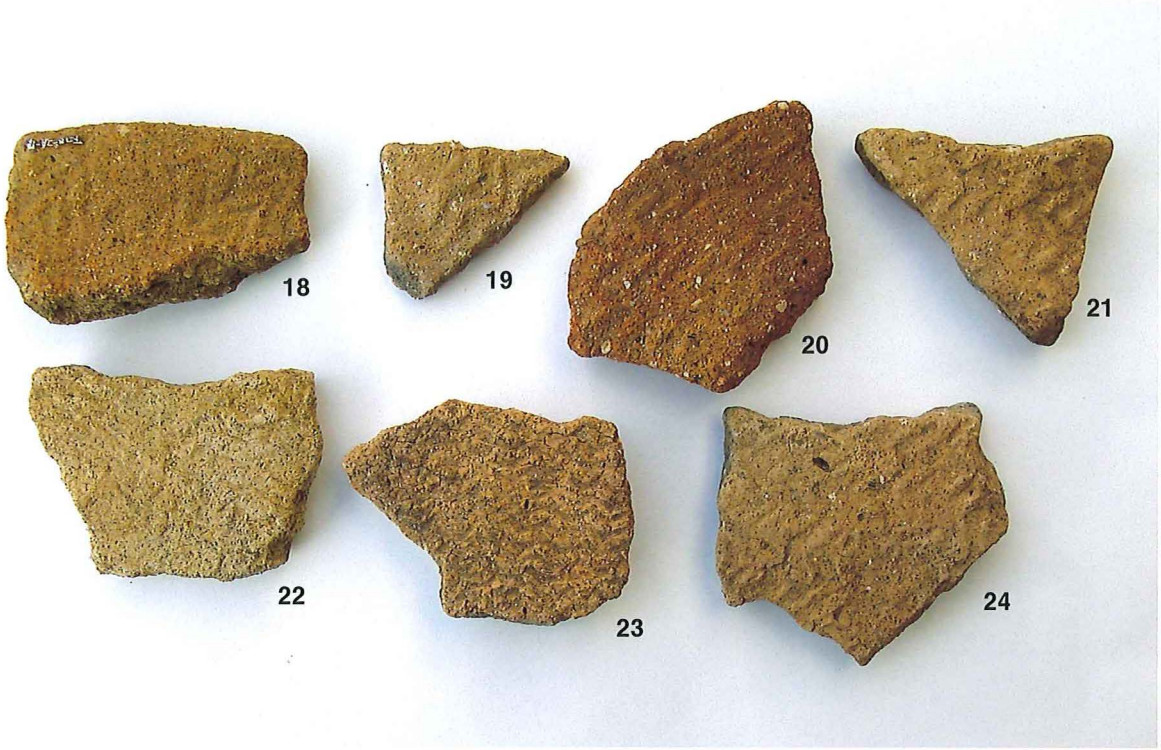


写真17　土器④

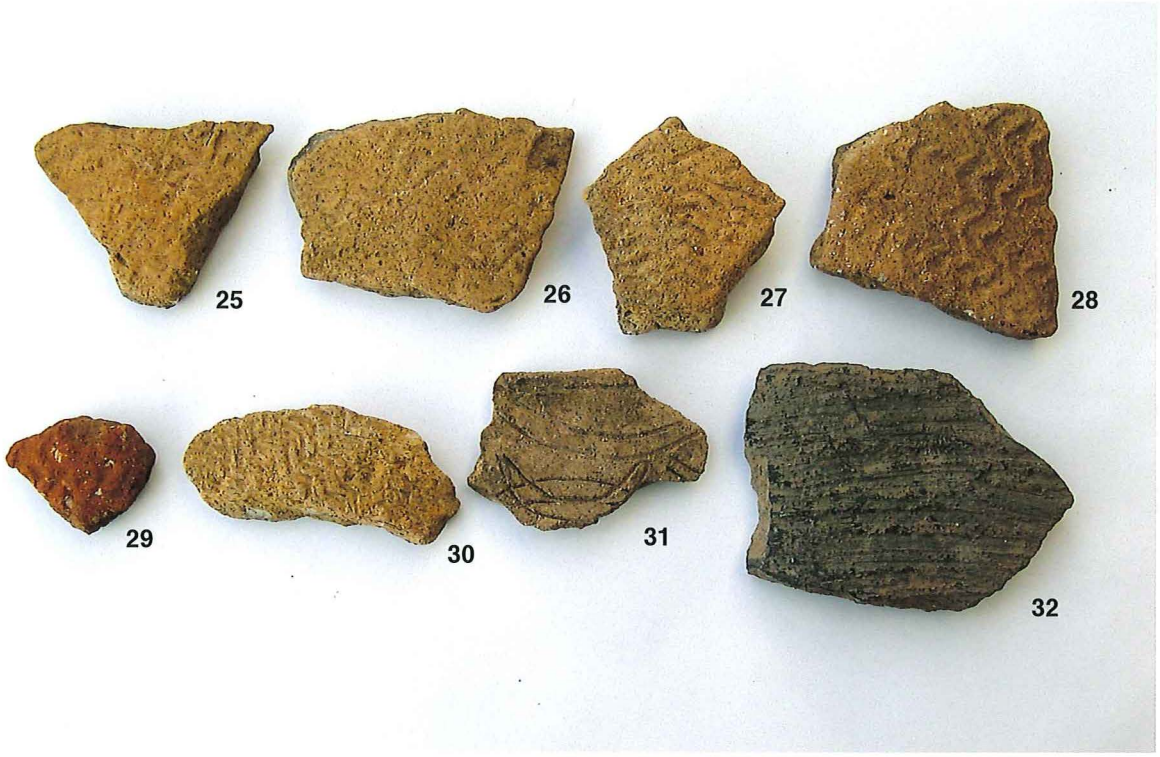


写真18　土器⑤

写真19　土器⑥

報告書抄録

ふりがな	しもこばいせき
書名	下木場遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第179集
編集者名	古門雅高・山田英明
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－0861　長崎県長崎市江戸町2-13　TEL095－826－5010
発行年月日	2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
しもこばいせき 下木場遺跡	みなみたかきぐん 南高来郡 ありえちょう 有家町 はらおみょうといの 原尾名通野	374	87	32° 40′ 49″	130° 19′ 52″	2002/12/16－ 2002/12/20 2003/08/18－ 2003/10/31	800㎡	農道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下木場遺跡	包蔵地	旧石器 縄文・弥生	柱穴，土坑 溝	三稜尖頭器 押型文土器 弥生後期土器 古式土師器 須恵器，敲石 石鏃，石斧	

長崎県文化財調査報告書　第179集

下木場遺跡

2004年3月30日

発行　長崎県教育委員会
〒850－8570
長崎県長崎市江戸町2番13号

発行　株式会社　インテックス
長崎市幸町6番3号
TEL:095-826-2200